

改訂レッドリスト  
付属説明資料

昆虫類

平成 22 年 3 月

環境省自然環境局野生生物課

## はじめに

「付属説明資料」は、平成18年12月及び平成19年8月に公表された改訂版レッドリストにおいて新規に掲載された種を基本に、それらの生息状況等を簡潔に解説したもので、本冊子は、その「昆虫類」版です。

すでに刊行されているレッドデータブックと合わせて、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く活用されることが望まれます。

改訂レッドリストの詳細については、以下のwebページを参照してください。

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=7849>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>

<http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8886>

## 掲載種と解説内容

平成19年8月3日に公表された昆虫類改訂レッドリストに掲載された566種・亜種のなかから、同リストにおいて新規に掲載された160種・亜種について、以下の内容を簡潔に解説しました。なお、記載内容は原則としてレッドリスト公表時のものです。

- カテゴリー区分（新ランク及び[新規掲載]の表記）
- 目名、科名
- 和名
- 学名、記載者名、記載年
- 生息状況等、以下の項目を簡潔に記載  
日本における固有性／形態と特徴／分布の概要／  
生息地の現況とその動向／存続を脅かしている原因とその種の危機の状況／保護対策  
(存続を脅かしている原因は、できる限り記述の統一を図るために、原則として別表に挙げたタイプ区分を用いコードを付記した。)
- 参考文献

### ■原因のタイプ区分表

---

森林伐採11	湖沼開発12	河川開発13	海岸開発14
湿地開発15	草地開発16	石灰採掘17	ゴルフ場21
スキー場22	土地造成23	道路工事24	ダム建設25
水質汚濁31	農薬汚染32		
園芸採取・観賞用捕獲・狩猟41	薬用採取42		
その他不法採集など43	踏みつけ51	捕食者侵入52	
管理放棄53	遷移進行・植生変化54	火山噴火55	
帰化競合56	異種交雑・放流57	産地局限61	
近交化進行62	その他71	不明99	

---

## 執筆

執筆はつぎの方々にお願ひし、執筆者名を種ごとの記載の末尾に明記しました。

秋元信一（北海道大学農学研究院）

石川 忠（東京農業大学農学部）

井上広光（果樹研究所）

大原昌宏（北海道大学総合博物館）

苅部治紀（日本蜻蛉学会）

岸本太郎（自然環境研究センター）

佐竹 潔（国立環境研究所）

庄野美德（住友化学株式会社）

鈴木信夫（日本女子体育大学）

須田真一（日本蜻蛉学会）

高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

高橋 滋（宇都宮大学農学部）

多田内 修（九州大学農学研究院）

長島聖大（伊丹市昆虫館）

中村康弘（日本チョウ類保全協会）

林 利彦（国立感染症研究所）

林 成多（ホシザキグリーン財団）

林 正美（埼玉大学教育学部）

平塚和弘（日本蜻蛉学会）

藤井 恒（日本チョウ類保全協会）

山崎柄根（東京都立大学名誉教授）

吉澤和徳（北海道大学農学研究院）

吉富博之（愛媛大学農学部）

## 今後の対応

環境省では、レッドリストや本冊子について広く普及を図ることで、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存への国民の理解を深めるとともに、関係省庁や地方公共団体等に配布することにより各種計画における配慮等を促す予定です。

また、レッドリストの掲載種の中で特に保護の優先度が高い種については、さらに生息状況等に関する詳細な調査の実施等により情報収集を行い、その結果及び生息・生育地域の自然的・社会的状況に応じて「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を検討します。

なお、レッドリストは、今後とも、5年ないし10年ごとに再調査と見直しを行う必要があるものと考えられます。

環境省自然環境局野生生物課

コウチュウ目 オサムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ミハマオサムシ *Ohomopterus arrowianus kirimurai* Kubota & Yahiro, 2005

本州中部に分布する日本固有種ミカワオサムシの亜種で、三重県南牟婁郡御浜町にのみ隔離分布する。体長 25～30mm 程度。形態と遺伝子の両側面から、他の亜種からの独立性が高いことが示されている。海辺に近い人里付近の丘陵地に生息し、分布域はきわめて狭い範囲に限られているため、生息域の環境改変と業者や愛好家による過度の採集圧 (41) は個体数減少を引き起こすと考えられるので注意が必要である。

【参考文献】 47)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 オサムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## リシリノマックレイセアカオサムシ

*Hemicarabus macleayi amanoi* Imura, 2004

北海道利尻島にのみ分布する日本固有亜種。種としては、ユーラシア大陸北東部とサハリンに分布する。体長 17mm 程度、上翅は金緑色で縁は金赤銅色の美しい色彩をもつ。日本の個体群は種としての分布域の最東端に位置し、利尻岳の高標高地のごく限られた急峻な斜面にのみ生息する。成虫は雪解けとともに活動を開始し、春に繁殖し、その他の小昆虫類を餌とする。生息地は利尻礼文サロベツ国立公園の特別保護地区内であり、環境そのものは保全されているが、密猟による捕獲圧 (41) に注意が必要である。

【参考文献】 34)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 オサムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## アマミナガゴミムシ *Pterostichus plesiomorphs* Nemoto, 1989

奄美大島だけから知られている日本固有種。体長 15mm 程度。本種が属する狭義のナガゴミムシ類の中で、最も南方に分布する種で、琉球列島に生息しているのは本種のみである。生息は山地の成熟林に限られ、分布域はきわめて狭く、個体数は減少傾向にある。現状では生息地の森林そのものの改変のおそれはないものの、マングースによる捕食 (52) と業者や愛好家による過度の採集圧 (41) が脅威となっている可能性が高い。

【参考文献】 74)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 オサムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## オガサワラモリヒラタゴミムシ *Colpodes laetus* (Erichson, 1834)

フィリピン、スラウェシ、ニューギニア、ソロモン諸島、ニューヘブリデス、サモア等、主に南太平洋に広く分布する種で、日本では小笠原諸島にのみ生息する。体長 10～12mm 程度。日本の個体群は分布域の南端に位置し、父島、母島、南硫黄島から記録がある。父島、母島ともにごく限られた範囲に生息域が残存しているのみ。昼間は地中や石下にひそみ、夜になると地表や樹上に出てきて活動する。外来種オオヒキガエルの捕食圧 (52) により激減したと考えられる。

【参考文献】 10)、54)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 オサムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ハハジマモリヒラタゴミムシ *Colpodes yamaguchii* (Kasahara, 1991)

小笠原諸島のみ分布する日本固有種。体長約 10mm で暗赤褐色の比較的細型のヒラタゴミムシ。1986 年に母島で採集された個体を元に 1991 年に記載された。その後、父島列島の弟島と兄島でも発見されたが、父島での記録はない。各島における個体数は少なく、父島ではすでに絶滅した可能性が高い。湿潤な森林の落葉落枝層で発見される。父島、母島ではオオヒキガエルの捕食圧 (52) が大きな脅威となっていると考えられ、実際に胃内容物から発見された例が知られている。

【参考文献】 41)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 タマムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ツマベニタマムシ 聳島亜種 *Tamamushia virida fujitai* Ohmomo & Karube, 2004

小笠原諸島の聳島だけから知られる亜種 (日本固有種)。体長 16~21mm で、体はほぼ全体が黒紫色、とくに前胸背は金緑色の光沢をもつという色彩的特徴から、父島列島と母島列島に分布する名義タイプ亜種とは容易に区別できる。成虫はヒメフトモモに集まり、幼虫はシャリンバイを寄主植物とすることが報告されている。森林に生活するが、聳島ではヤギによる植生被害など、長年による外来生物の影響を受けて生息環境が著しく劣化した状態が続いていた。ヤギが全面駆除された現在でも、在来の森林生態系は復元に至っておらず生息環境はきわめて脆弱である。

【参考文献】 86)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 ハナノミ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## オガサワラキンオビハナノミ *Variimorda inomatai* Takakuwa, 1985

小笠原諸島の母島だけから知られる日本固有種。体長 4.8~6mm で、鞘翅は肩部が赤褐色、金黄色の帯紋や斜紋をそなえる。1976 年に採集された数頭の個体を基に新種記載されたが、その後の採集例は少なく、とくに 2000 年代における生息情報はない。成虫は林床や林縁の葉上に見かけ、敏捷に活動するが、雌は枯れ木に産卵すると考えられるので、その際はとくにグリーンアノールによる捕食圧が大きいと思われる。外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 107)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 ハナノミ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ニセミヤマヒメハナノミ *Falsomordellistena pseudalpigena* Nomura, 1975

小笠原諸島の父島と母島 (未発表) から知られる日本固有種。体長 2.5~3.5mm 前後で、鞘翅は会合部や基部に淡黄色の紋をそなえる。1970 年代に父島から採集された多数の個体を基に新種記載されたが、その後の採集情報は少なく、2000 年代では母島の一部地域で生息がわずかに確認されたにすぎない。成虫は夜間に活動し、明るい間はオガサワラビロウなどの枯れ葉に潜むと推察される。グリーンアノールの捕食圧を強く受けていると思われる。

【参考文献】 80)、108)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 ハナノミ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ワタナベヒメハナノミ *Falsomordellistena watanabei* Nomura, 1975

小笠原諸島の父島と母島から知られる日本固有種。体長 2.5~3.5mm 程度で、鞘翅の大部分に淡黄色微毛が広がる。1970 年代に父島と母島から採集された多数の個体を基に新種記載されたが、その後の採集情報は少なく、2000 年代では父島と母島の一部地域で生息がわずかに確認されたにすぎない。成虫は夜間に活動し、明るい間はオガサワラビロウなどの枯れ葉に潜むと推察される。グリーンアノールの捕食圧を強く受けていると思われる。

【参考文献】 80)、108)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ムコジマトラカミキリ *Chlorophorus kusamai* Satô, 1999

小笠原諸島の聳島列島の聳島だけに分布する日本固有種。体長 9~9.5mm 前後で、同所的に分布するムコジマイイロトラカミキリときわめてまぎらわしいが、一般により大型なので区別がつく。成虫はわずかに残された樹林地の花に見られるものの、個体数はきわめて少ない。生息地では野ヤギが完全駆除され、その食圧による固有植生の崩壊が防止されたものの、外来樹種であるギンネムが優占する傾向にあり、生息環境はきわめて脆弱と考えられる。

【参考文献】 77)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 ハムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## アオノネクイハムシ *Donacia frontalis* Jacoby, 1893

日本 (本州)、台湾、中国に分布する。湿地に生息し、タチスゲなどのカヤツリグサ科を寄主とする。カツラネクイハムシ *Donacia katsurai* Kimoto, 1981 に酷似しており、識別には雄交尾器の検討が必要。国内では、1980 年代に兵庫県の 1 か所で多数の個体の生息が確認されていたが、1985 年を最後に記録が途絶えた。さらに注意深い調査の実施に関わらず、他の生息場所も発見されないまま現在に至っており、国内での絶滅が危惧される。

【参考文献】 18)、19)

執筆者：林 成多 (ホシザキグリーン財団)

コウチュウ目 ゾウムシ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヒメカタゾウムシ母島亜種

*Ogasawarazo rugosicephalus hahajimaensis* Morimoto, 1981

小笠原諸島母島列島の母島に分布する日本固有の一亜種。体長 5~7mm。成虫は各種樹木の葉の表面を齧るように食べ、食痕は特徴的で明瞭。グリーンアノールの捕食の影響 (52) によって激減したと考えられ、その生息域はかなり限定されている。グリーンアノールが侵入していない母島属島には近縁と考えられる未記載の別種が生息しており、本亜種の分布は母島だけと考えられる。これらのことについては、現在、分類学的再検討が行われている。

【参考文献】 63)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

ハエ目 ブユ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## サツマツノマユブユ *Simulium satsumense* Takaoka, 1976

日本固有種。下甌島のみから発見されている。体長約 3.5mm。翅径脈基部が有毛、胸部側面の膜質部は無毛、腹側板は雄で無毛、雌では数本の微毛が生じる。雌の爪には大きな基部突起がある。下甌島手打の水田地帯の小さな湧水で発見されていたが、大規模な水田改良事業により生息水系が消失し、その後発見されていない。

【参考文献】 111)

執筆者：林 利彦 (国立感染症研究所)

ハエ目 ブユ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヨナクニウオレスブユ *Simulium yonakuniense* Tokunaga, 1972

与那国島に産し、国外では台湾の蘭嶼島で知られる。体長 5.5~6mm。胸部は腹側板と膜質部に毛がはえ、後脚脛節前面基半部に隆起帯がある。現在までに与那国島の 1 水系のみで発生が確認されているが、小ダム建設(25)により発生箇所が湧水点から 10m 以内の流水部のみとなってしまう絶滅が危惧される。

【参考文献】 111)

執筆者：林 利彦 (国立感染症研究所)

ハエ目 ニクバエ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヨナハニクバエ *Sarcophaga yonahaensis* (Kano & Field, 1963)

日本固有種。沖縄本島北部のみから知られる。体長 6~12mm。ニクバエ科のハエ類は中胸背に 3 本の黒条があり、外形や色が互いによく似ている。正確な同定には交尾器の形態を調べなくてはならない。既知の産地では森林伐採(11)が進み、最近ではまったく採集されていない。

【参考文献】 39)

執筆者：林 利彦 (国立感染症研究所)

ハエ目 カ科

CR+EN (絶滅危惧 I 類) [新規掲載]

## ヤツシロハマダラカ *Anopheles yatsushiroensis* Miyazaki, 1951

本州、九州に分布し、国外では中国、朝鮮半島に生息する。体長 4~5.5mm。シナハマダラカに酷似し、小顎肢の白鱗の出現具合や白帯の幅で区別しているが、同定は非常に困難である。かつてはあまり手入れのよくない水田や小沼沢から発生していたが、湿地開発(15)や土地造成(23)等により発生源が失われ、1970 年以降確実な採集記録はない。

【参考文献】 26)

執筆者：林 利彦 (国立感染症研究所)

チョウ目 シジミチョウ科

CR+EN (絶滅危惧Ⅰ類) [新規掲載]

## ウスイロオナガシジミ九州亜種 *Antigius butleri kurinodakensis* Fujioka, 1975

九州の鹿児島県霧島山系栗野岳にのみ生息する固有亜種。種ウスイロオナガシジミは北海道、本州に広く分布する。小型のシジミチョウで、翅表は淡褐色で、裏面は灰白色で多数の黒色の斑紋がある。栗野岳中腹にあるカシワ林にのみ生息する。公園化や道路工事、カシワ以外の樹種の植栽などによりカシワ林の面積が減少したこと、若いカシワの木が減ったことなどにより、著しく減少したと考えられ、絶滅寸前の状態である。

【参考文献】 11)、104)

執筆者：藤井 恒 (日本チョウ類保全協会)

トンボ目 サナエトンボ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オグマサナエ *Trigomphus ogumai* Asahina, 1949

長野、岐阜、愛知の各県から西の本州、四国、九州にやや局地的に分布する日本固有種。日本産本属の最大種で胸部の斑紋などで区別される。平地から丘陵地にかけての植生の豊かな池沼や緩流などに生息する。水質汚濁(31)や護岸改修、生息地の埋立て(23)やゴルフ場造成(21)などの大規模開発、農業形態の変化によるため池や水路の管理放棄(53)などの影響で分布域のほぼ全域で減少が著しい。また、オオクチバスなどの捕食性外来魚による捕食圧(52)も無視できないと考えられる。

【参考文献】 1)

執筆者：須田真一・苅部治紀 (日本蜻蛉学会)

トンボ目 エゾトンボ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ハネビロエゾトンボ *Somatochlora clavata* Oguma, 1913

北海道、本州、四国、九州および佐渡、隠岐、対馬など一部の離島に局地的に分布する。日本固有種とされていたが、近年、朝鮮半島より記録された。日本産本属の最大種で雌の腹部に黄色斑がないことなどで区別される。平地から丘陵地の湿地や谷津田、河川敷などの、湧水や伏流水に涵養される緩流に生息する。圃場整備などによる水路の護岸改修、谷津田の放棄による水路の消失(53)に加え、生息地の埋立て(23)やゴルフ場造成(21)などの大規模開発の影響で分布域のほぼ全域で減少が著しい。

【参考文献】 1)

執筆者：須田真一・苅部治紀 (日本蜻蛉学会)

カメムシ目 キジラミ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ムニンヤツデキジラミ *Cacopsylla boninofatsiae* Inoue & Miyatake, 2001

小笠原諸島のみに分布する日本固有種。翅端までの全長約3mmで、体は黄褐色、翅は透明で前翅前半部の翅脈は黒褐色。母島で採集された標本を基に、2001年に新種記載された。その後、父島、向島、北硫黄島からも記録されたが、産地は局限される。母島では寄主植物が生える山地の稜線で発見されるが、個体数は多くない。寄主は小笠原固有種のムニンヤツデ(ウコギ科)のみで、やはり環境省レッドリスト(植物Ⅰ)の絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されている。単食性と考えられ、寄主植物の衰亡に合わせて減少・絶滅する危険性が高い。

【参考文献】 35)

執筆者：井上広光 (果樹研究所)

カメムシ目 キジラミ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## チャマダラキジラミ *Cacopsylla maculipennis* Inoue & Miyatake, 2001

小笠原諸島のみ分布する日本固有種。翅端までの全長約2.5mmで、前翅全体に濃褐色小斑を多数散りばめた特徴的な斑紋を有する。母島で採集された標本を基に、2001年に新種記載された。その後、北硫黄島からも記録されている。寄主植物は小笠原固有種のシロトベラ（トベラ科）のみが知られ、母島では山地の稜線で発見されている。日本産キジラミ類の中で最も分布が局限される種の一つで、個体数も少ない。寄主植物の衰亡次第で減少・絶滅する危険性が高い。

【参考文献】 35)

執筆者：井上広光（果樹研究所）

カメムシ目 アブラムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ツツジヨブアブラムシ *Elatobium itoe* (Takahashi, 1925)

これまでに日本と台湾からのみ記録されているツツジ属を寄主とするアブラムシ。体長2mm前後で暗緑や赤みを帯びた茶色で、一部には微妙な緑部分がある個体がいる。1924年に台湾で採集された個体で記載され、その後、日本でも1966年に兵庫県と香川県で発見され、1981年に栃木県でも得られた。しかし、この3例以外採集記録はなく、30年近く確認されていない。おそらく、本種はツツジ属を冬寄主とする寄主転換型の生活環をもつアブラムシで、何らかの開発(99)による未知の夏寄主の減少などが、大きく影響していると思われる。

【参考文献】 60)、105)

執筆者：高橋 滋（宇都宮大学農学部）

カメムシ目 アブラムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ハシバミヒゲナガアブラムシ *Unisitobion corylicola* Shinji, 1930

カバノキ科のハシバミ属、クマシデ属に寄生する日本固有種。体長4mm前後、濁黄～黄緑色で、しはしば背面が茶色を帯びる大型のアブラムシ。札幌市などで、ツノハシバミ、トクリハシバミ、アカシデから6～8月に得られているところから、寄主転換をしないアブラムシと考えられている。約25年前の1982年に栃木県で1回採集されて以来、その後の確認ができない種である。しかし、本種は自然の森林に棲むアブラムシ(61)で、大発生しないため、我々の目にとまらない可能性もあるが、本州ではとくに貴重なアブラムシである。

【参考文献】 60)、99)

執筆者：高橋 滋（宇都宮大学農学部）

コウチュウ目 オサムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## コハンミョウモドキ *Elaphrus sibiricus* Motschulsky, 1845

北海道、本州中部以北に分布し、国外では中国、シベリア等の東アジアに分布する。体長6～6.5mm、前胸、上翅の幅が狭く、上翅の眼状紋の間の鏡状の部分が発達する。平地の河川敷、湿地周辺のほか、里地・里山の果樹園や畑の地表に生息している。成虫は春から初夏に地表を走りまわり、小動物を捕食しているものと考えられる。かつては各地で記録され、場所によっては個体数が多いと報じられていたが、近年は全国的に非常に記録が少なくなっている。生息地の物理的な改変、消失が減少の大きな原因と考えられる。

【参考文献】 9)、67)

執筆者：岸本年郎（自然環境研究センター）



コウチュウ目 オサムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## イスマナガゴミムシ *Pterostichus isumiensis* Kasahara & Saito, 1997

本州のみに分布する日本固有種。体長 12~20mm。千葉県房総半島のごく狭い地域の丘陵林と、隣接する谷津に成立した湿生草地の地表に生息する。神奈川県鶴見川に局所的に生息するヨコハマナガゴミムシに近縁で、両種ともに平地に遺存的に残った個体群だと考えられている。成虫は春から秋にかけて出現し、地表で小動物を捕食していると考えられるが、生態についての詳細は不明。

【参考文献】 9)、42)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 オサムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ジャアナヒラタゴミムシ *Jujiroa ana* (S. Uéno, 1955)

本州のみに分布する日本固有種。体長 12.5mm 程度、体のキチン質化が弱く褐色で、雄の跗節下面の吸着毛を欠く。東海地方の限られた地点からのみ記録されている。地中の地下浅層や洞窟を生息場所とする地中性の甲虫で、稀に森林の林床で確認されることもある。タイプ産地の洞窟では減少しており、洞窟や生息地周辺の森林の乾燥化、愛好家による過度の採集圧 (41) が脅威となっている可能性が高い。

【参考文献】 1)、126)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 ガムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## エゾガムシ *Hydrophilus dauricus* Mannerheim, 1852

日本では北海道にのみ分布し、女満別町、大樹町、池田町、豊頃町などの、おもに道東地方の池や湿地から記録されている。北海道全域には近似のガムシが分布する。ガムシとは、腹部正中部が稜状に隆起しないこと、雄の前脚の第5跗節が強く三角形に広がることにより区別することができる。生態や生息環境もガムシとはほぼ同様と考えられる。本種は、農地開発等による湿地や池などの止水環境の消失により、生息地の減少が懸念される。

【参考文献】 29)、72)、130)、131)、132)、133)、134)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)・吉富博之 (愛媛大学農学部)

コウチュウ目 クワガタムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ダイトウヒラタクワガタ *Dorcus titanus daitoensis* (Fujita & Ichikawa, 1986)

大東諸島の固有亜種。最近の研究によって、形態面でも、また遺伝的な面でも南西諸島の他の亜種とは大きく異なった独自性の高い亜種であることが判明している。日本の亜種の中で、もっとも分布域が狭い上に、農地開拓の進んだ大東諸島では生息環境である森林はきわめて限られた面積しかない。さらに近年のクワガタ採集ブームを背景にした乱獲 (41)、とくに生息環境の破壊につながる幼虫採集の影響が深刻である。

【参考文献】 83)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)

コウチュウ目 コブスジコガネ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オオコブスジコガネ *Omorgus chinensis* (Boheman, 1858)

アジア一帯に広く分布するが、日本国内での分布は関東と伊豆諸島さらに東海にかけての沿岸部、九州（長崎県、鹿児島県）の沿岸部に限定される。体長 11.0～13.1mm。確実な生息記録は数えるほどしかなく、生息地での個体数も少ない。浜に打ち上げられた海鳥、魚の死体に集まる。灯火にも飛来する。自然度の高い海浜環境が生息条件として必須であるが、近年の開発や護岸工事（14）によってその生息環境破壊が著しく、絶滅が危惧される。

【参考文献】 43)、46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## チャバネエンマコガネ *Onthophagus gibbulus* (Pallas, 1781)

国内では北海道サロベツ海岸のみに分布する。新潟県の記録は確認が必要。国外では朝鮮半島、中国、シベリアからヨーロッパまで旧北区に広く分布。海岸の牧場の新鮮な牛糞に生息し、内陸部には分布せず、海岸部の砂地、開放環境が必要なが指摘されている。イヌ、キツネ、シカの糞からの記録がある。主な生息地であるサロベツ海岸では、オープンな放牧地の面積が減少しており、かつ大規模な砂採取が行われていることから、生息地の環境破壊が懸念される。

【参考文献】 46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ヤクシマエンマコガネ *Onthophagus yakuinsulanus* Nakane, 1984

屋久島の固有種。新種記載後 20 年にわたってホロタイプのみしか知られていなかったが、つい最近になって雌を含む複数の個体が発見されるに至った。体長 8.0～11.5mm。山岳地の多い屋久島にあって本種の生息地は島南部の集落に近い平地林というきわめて限定された地点であり、生息環境の破壊が懸念される。新鮮なイヌ、ヒト、ウシなどの糞トラップと羽毛トラップでも採集されているが、生態面は不明な点が多い。後翅が退化しており、移動能力も著しく限定されると予想されることから絶滅が危惧される。

【参考文献】 46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ツヤケシマゲソコガネ *Aphodius gotoi* Nomura & Nakane, 1951

北海道、本州に分布する日本固有種。体長 4.5～5.5mm。ダイコクコガネとミヤマダイコクコガネの育児巣に生息し、糞塊や糞球に産卵する。近年、ダイコクコガネの分布域が激減していることから、本種の生息が確認できなくなっている。特異な寄生生活という生態をもつため、ホストであるダイコクコガネの個体数の変動に影響されやすい。ダイコクコガネはハエ用駆除殺虫剤への抵抗性が弱く個体数を激減させており、本種の個体数変動も連動していると考えられ、注視が必要な種である。

【参考文献】 46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 ヒメドロムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## アヤスジミゾドロムシ *Graphelmis shirahatai* (Nomura, 1958)

南方系の一群で、本州（山形県～島根県）に分布する。体長 3.4～3.7mm、淡黄色で黒色の縦帯紋があり、近年まで灯火で採集されたわずかな記録があるのみであったが、最近になり一級河川中流域の水の中にある流木下面にしがみついている個体が採集された。現在のところ、山形県、東京都、兵庫県（以上3都県は近年の確認記録なし）、愛知県、島根県で記録されている。中下流部の流木に強く依存する種であり、河川中下流域の開発や護岸工事（13）以外に、上流域に存在するダムや堰等の河川構造物の影響により生息地である中下流域に流木等が供給され難くなり、生息環境が急速に悪化していると考えられる。

【参考文献】 22)、143)、148)、154) 執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）・吉富博之（愛媛大学農学部）

コウチュウ目 ヒメドロムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## セマルヒメドロムシ *Orientalmis parvula* (Nomura & Baba, 1961)

新潟県がタイプ産地であったが、河川改修で唯一の生息地も破壊されてしまい、その後の記録は最近になるまでまったくなかった。近年、中国地方（山口県、広島県）と九州（福岡県）の河川から再発見された。体長 1.5～1.6mm、黒色で上翅に4橙色紋があり、前胸背両側に明瞭な縦溝がある。生息環境は植物が繁茂した砂洲の側面がえぐれたような場所であり、微環境が本種の生息の必要条件となっていると考えられる。河川改修（13）や河川の水質汚濁（31）、河川構造物の存在に伴う上流域からの砂泥の供給量の変化等が、本種の生息環境の悪化に繋がっている可能性が指摘される。

【参考文献】 3)、81)、82)、93) 執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）・吉富博之（愛媛大学農学部）

コウチュウ目 タマムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## オガサワラムツボシタマムシ父島列島亜種

*Chrysobothris boninensis boninensis* Y. Kurosawa, 1980

小笠原諸島の聳島、弟島、兄島、父島にのみ知られる亜種（日本固有種）。体長 8～11mm で、色彩が異なるほか前胸背に横しわをもつなどの特徴から、母島亜種と区別できる。成虫は伐採木や倒木に集まるが、動作はきわめて俊敏である。父島ではかつて比較的多く見られたが、1980年代後半以降の生息情報がないらしい。グリーンアノールの捕食圧（52）を強く受けていると思われるとともに、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 40)、51)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 タマムシ科

VU (絶滅危惧II類) [新規掲載]

## ツマベニタマムシ父島・母島列島亜種

*Tamamushia virida virida* Miwa & Chujo, 1935

小笠原諸島の父島列島（弟島、兄島、父島）と母島列島（母島、向島、姉島）から知られる名義タイプ亜種（日本固有種）。体長 13～20mm で、体の美しい色彩的特徴から、聳島亜種とは容易に区別できる。成虫はヒメフトモモに集まり、幼虫はシマシャリンバイを寄主植物とする。父島と母島ではかつて比較的多く見られたが、1990年代以降は生息情報がない。グリーンアノールの捕食圧（52）を強く受けていると思われるとともに、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 40)、51)、52)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 ハナノミ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オガサワラキボシハナノミ *Hoshihananomia trichopalpis* Nomura, 1975

小笠原諸島の弟島、兄島、父島、母島から知られる日本固有種。体長9~10.5mmで、前胸背は独特な黄紋を持ち、鞘翅黄色紋は中央紋の外後方に1対の円紋を現す。成虫はモモタマナなどの花からしばしば得られ、産卵木としてコヤブニッケイが報告されている。父島と母島ではかつて比較的多く見られたが、1990年代後半以降は生息情報がない。グリーンアノールの捕食圧(52)を強く受けていると思われるとともに、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 108)

執筆: 高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 ハナノミ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ニセチャイロヒメハナノミ *Falsomordellistena rosseoloides* Nomura, 1975

小笠原諸島の父島と西島だけから知られる日本固有種。体長3~3.5mm前後で、背面は金紫色光沢を帯びた暗色毛で被われる。1972年に父島で採集された13頭の個体を基に新種記載されたが、その後の採集情報は少なく、西島でわずかな個体が確認されているにすぎない。成虫は夜間に活動し、明るい間はオガサワラビロウなどの枯れ葉に潜むと推察される。グリーンアノールの捕食圧(52)を強く受けていると思われる。

【参考文献】 80)、108)

執筆: 高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ヨツボシカミキリ *Stenygrinum quadrinotatum* Bates, 1873

インドシナ半島から日本にかけて分布する。体長8.5~13.5mmで、鞘翅には2対の特徴的な淡色紋を現す。日本ではほぼ全土に広く分布し、主要な島嶼からも記録されている。成虫はクリなどの花や各種広葉樹の伐採木から多く得られ、また灯火にもよく飛来するほどの優占種であったが、1980~1990年代以降は各地で衰亡が著しく、2000年代の採集記録はきわめて少ない。衰亡の原因は明らかにされていないが、里山環境の荒廃がその一つと言われる。

【参考文献】 75)

執筆: 高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オガサワラトラカミキリ *Chlorophorus boninensis* Kano, 1933

小笠原諸島に分布する日本固有種。体長8~11mmで、島嶼により色彩と斑紋、体型の変化があり、ときにオガサワラキイロトラカミキリやムコジマトラカミキリとまぎらわしいが、一般により大型なので区別がつく。父島では戦後の記録がなく、また母島でも1990年代以降の生息情報はごく少ない。成虫は各種の花や伐採木に見られる。グリーンアノールの捕食圧(52)を強く受けていると思われるとともに、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 52)、109)

執筆: 高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オガサワラキイロトラカミキリ *Chlorophorus kobayashii* Komiya, 1976

小笠原諸島に分布する日本固有種。体長7~13mmで、島嶼により色彩と斑紋、体型の変化があり、ときにオガサワラトラカミキリとまぎらわしいが、一般により細型なので区別がつく。父島と母島では1980年代までは個体数が多かったが、1990年代以降の生息情報はごく少なく、2000年代の採集例はない。成虫はモモタマナなど各種の花や伐採木に見られる。グリーンアノールの捕食圧(52)を強く受けていると思われるとともに、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 52)、109)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オキナワサビカミキリ *Diboma costata* (Matsushita, 1933)

中国南部から台湾、南西諸島、九州南部に分布する。体長8~12mmで、やや筒状の体を持ち、鞘翅には独特な不明瞭な斑紋をもつ。南西諸島では個体数はやや少ないものの、与那国島から屋久島・種子島まで多くの島嶼から記録されていたが、1990年代後半以降の生息情報はごくわずかしき得られていない。成虫は枯れたタケ類から採集されるほか、灯火にも飛来する。衰亡の原因は明らかにされていない。

【参考文献】 75)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 ゾウムシ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## ハハジマヒメカタゾウ *Ogasawarazo mater* Morimoto, 1981

小笠原諸島の母島列島に分布する日本固有種。体長5~7mm。成虫は各種樹木の葉の表面を齧るように食べ、食痕は特徴的で明瞭。グリーンアノールの捕食(52)の影響によって激減したと考えられ、その生息域は限定されている。母島属島の姉島、妹島、姪島からの記録があるが、それらの島の個体群は、現在行われている分類学的再検討により別種とされる可能性がある。

【参考文献】 63)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

ハチ目 ドロバチ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オガサワラチビドロバチ

*Stenodynerus ogasawaraensis* Sk. Yamane & Gusenleitner, 1982

小笠原諸島だけに分布する日本固有種。体長5~5.5mm、色彩2型が知られ、父島・母島と母島・婿島から別亜種として記録されている。各島における個体数は少なく、グリーンアノール等の影響(52)が懸念される。

【参考文献】 135)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ジガバチ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## チチジマジガバチモドキ *Trypoxylon chichidzimaense* Tsuneki, 1973

小笠原諸島のみに分布する日本固有種。体長 10.5~11 mm。父島から2雌に基づき記載され、その後母島からも記録されたが個体数は少なく、グリーンアノール等の影響 (52) が懸念される。

【参考文献】 73)、119)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ギングチバチ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オガサワラギングチバチ *Lestica rufigaster* Tsuneki, 1984

小笠原諸島のみに分布する日本固有種。母島からのみ発見されており個体数は少なく、グリーンアノール等の影響 (52) が懸念される。

【参考文献】 122)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

トビケラ目 ニンギョウトビケラ科

VU (絶滅危惧Ⅱ類) [新規掲載]

## オガサワラニンギョウトビケラ *Goera ogasawaraensis* Kuranishi, 2005

小笠原諸島父島列島に分布する日本固有種。父島及び兄島に生息する。成虫は茶褐色で、体長は雄が 4.3~4.7mm、雌が 4.4mm。近縁のニンギョウトビケラよりも著しく小型。幼虫や蛹は砂粒を用いた巣を作る。河川の源流域~上流域に生息する。元々、生息域が限定されていたと考えられるが、ダムの建設 (25) や河川の水量の減少が脅威となっている。また、グリーンアノールによる捕食 (52) の影響も懸念されている。

【参考文献】 90)、91)

執筆者：佐竹 潔 (国立環境研究所)・岸本年郎 (自然環境研究センター)

トンボ目 イトトンボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## モートンイトトンボ *Mortonagrion selenion* (Ris, 1916)

北海道南部、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、中国中部、ロシア沿海州などに分布する。雄の眼後紋は弧状で腹端部が広く橙色であることなどで区別される。おもに平地から丘陵地の草丈の低い湿地に生息する。本種は湿地の遷移初期に見られることが多く、永続的な生息地はきわめて限られる。休耕地や放棄田にもしばしば生息するが、植生遷移や乾燥化 (54) によって短期間の発生に終わることが多い。熊本県では県条例による指定希少野生動植物に指定されている。

【参考文献】 48)

執筆者：須田真一 (日本蜻蛉学会)

トンボ目 サナエトンボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オオサカサナエ *Stylurus annulatus* (Djakonov, 1926)

琵琶湖淀川水系と三重県の1水系のみに分布する。国外では朝鮮半島から中国東部～東北部、ウスリーなどに分布する。日本産本属の最小種で腹部9・10節の黄色斑の形状で区別される。琵琶湖淀川水系ではメガネサナエと混生するが、本種は河川に多く、不明瞭な棲み分けが見られる。近年、分布域全域で減少しており、その理由としては水質汚濁(31)や河川改修(13)などが考えられるが不明な点も多い。琵琶湖ではオオクチバスなどの捕食性外来魚による捕食圧(52)に曝されている。

【参考文献】 141)

執筆者：須田真一（日本蜻蛉学会）

トンボ目 サナエトンボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ナゴヤサナエ *Stylurus nagoyanus* (Asahina, 1951)

東北地方南部以西の本州、四国、九州に局地的に分布する日本固有種。北海道からも記録がある。メガネサナエに酷似するが、やや小型で腹部の黄色斑が環状であることで区別される。おもに平地の大きな湖沼や河川下流域に生息し、過去にはメガネサナエとの混生地も知られていた。減少の理由としては水質汚濁(31)や河川改修(13)、湖沼の干拓(12)などが考えられるが不明な点も多い。千葉県や愛知県の生息地ではモーターボートの航行波や釣り人の踏みつけによる羽化阻害が指摘されている。

【参考文献】 1)、88)

執筆者：須田真一（日本蜻蛉学会）

トンボ目 サナエトンボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## メガネサナエ *Stylurus oculatus* (Asahina, 1949)

東北地方から近畿地方にかけて局地的に分布する日本固有種。日本産本属の最大種で腹部の黄色斑が環状にならないことで区別される。おもに砂質底の平地の大きな湖沼や河川下流域に生息する。各地で絶滅が進行し、近年では諏訪湖と琵琶湖淀川水系以外ではほとんど記録されていない。減少の理由としては水質汚濁(31)や河川改修(13)、湖沼の干拓(12)などが考えられるが不明な点も多い。諏訪湖と琵琶湖ではオオクチバスなどの捕食性外来魚による捕食圧(52)に曝されている。

【参考文献】 1)

執筆者：須田真一・荻部治紀（日本蜻蛉学会）

トンボ目 サナエトンボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## フタスジサナエ *Trigomphus interruptus* (Selys, 1854)

静岡、岐阜、滋賀、福井の各県から西の本州、四国、九州および壱岐など一部の離島にやや局地的に分布する日本固有種。同属他種に酷似するが胸部の斑紋などで区別される。平地から丘陵地にかけての植生の豊かな池沼に生息する。減少理由としては、水質汚濁(31)や護岸改修、生息地の埋立て(23)やゴルフ場造成(21)などの大規模開発、農業形態の変化によるため池の管理放棄(53)などが挙げられる。また、オオクチバスなどの捕食性外来魚による捕食圧(52)も無視できないと考えられる。

【参考文献】 1)

執筆者：須田真一（日本蜻蛉学会）

トンボ目 ヤンマ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ネアカヨシヤンマ *Aeschnophlebia anisoptera* Selys, 1883

東北地方南部以西の本州、四国、九州および対馬など一部の離島にやや局地的に分布する。国外では中国中部に分布する。同属のアオヤンマとは黒地に黄緑色斑をもつことで容易に区別できる。平地から丘陵地のヨシやガマなどの大型抽水植物の繁茂した池沼や湿地などに生息する。生息地の埋立て (23) やゴルフ場造成 (21) などの大規模開発によって生息地が減少している。休耕田や放棄田にも生息するが、植生遷移や乾燥化 (54) によって短期間の発生に終わることが多い。

【参考文献】 1)

執筆者：須田真一・苅部治紀 (日本蜻蛉学会)

トンボ目 エゾトンボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミナミトンボ *Hemicordulia mindana nipponica* Asahina, 1980

宮崎県、種子島、トカラ列島中之島、石垣島、西表島に分布し、国外では台湾に同一亜種が分布する。同属他種と酷似するが、最も小型で分布域も異なる。平地から低山地にかけての緩流や植生の豊かな池沼などに生息する。本土唯一の生息地がある宮崎県では近年生息が確認されていない。その原因としてはホテイアオイの繁茂による開放水域の減少 (54) や水質汚濁 (31) が挙げられる。石垣島では、林道 (24)、河川改修 (13)、ダム (25) などによる生息環境の悪化が著しい。

【参考文献】 61)

執筆者：須田真一・苅部治紀 (日本蜻蛉学会)

トンボ目 トンボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## エゾアカネ *Sympetrum flaveolum flaveolum* (Linnaeus, 1758)

北海道に局地的に分布し、青森県からも記録がある。青森県を含めた日本海側の記録は大陸からの飛来に由来するとも指摘されている。国外ではユーラシア大陸中～北部周辺に広く分布する。中型で翅の基部に広く鮮やかな橙黄色斑があることなどで区別される。おもに平地の植生の豊かな湿原に生息する。道東や道北の湿原では多産地も知られていたが、近年急速に減少している。その原因としては植生遷移 (54) などが考えられるが、目立った環境変化がない場所でも減少しており不明な点が多い。

【参考文献】 27)

執筆者：須田真一・平塚和弘 (日本蜻蛉学会)

バッタ目 コオロギ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ムニンツヅレサセコオロギ *Velarifictorus politus* Ichikawa, 2001

小笠原諸島のみ分布する日本固有種。本土のツヅレサセコオロギより少し小さめで、体長は雄で 13 mm 前後、雌で 15～16 mm。つやがある。2001 年に記載されたが、その存在は以前より知られたものである。林内にも見られるが、開けた草原にも見られることがある。近年、開発により次第にその生息域が狭められてきている。局所的に生息数が比較的多く見られるところもあるが、父島ではオオヒキガエルの捕食圧 (52) が大きな脅威となっていると考えられる。

【参考文献】 32)

執筆者：山崎柄根 (東京都立大学名誉教授)



バッタ目 ヒシバッタ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## アマミヒラタヒシバッタ *Austrohancockia amamiensis* Yamasaki, 1994

奄美大島、徳之島に分布する日本固有種。薄暗い林縁の湿った地表、同じく林縁樹木の根元近くなどが好適環境になっている。体長は雄で 10 mm 前後、雌で 14.5 mm 前後。前胸背板は短めながら、前半幅広く、かつ肩が張ったような、厚みのある種である。後脚が短いのであまり跳ばない。近年、森林伐採 (11) に加え、林縁が切り払われ舗装されたり、舗装されなくても車の通る道となり、あるいは側溝が作られるなど (24)、生息環境が劣悪になりつつあり、個体数が減少している。

【参考文献】 136)

執筆者：山崎柄根 (東京都立大学名誉教授)

カメムシ目 キジラミ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## エノキカイガラキジラミ *Celtisaspis japonica* (Miyatake, 1968)

本州、九州の丘陵地～低山地に分布し、国外では韓国から記録がある。翅端までの全長 4～5 mm の比較的大型のキジラミで、前翅を含め全体に茶褐～黒褐色。幼虫は寄主植物であるエノキ (ニレ科) の葉にツノ状の虫えい (ゴール) を形成し、その開口部を貝殻状の白色分泌物で覆う特性がある。寄主植物は各地に普通であるが、本種の産地は局限される上に近年は減少が著しく、多くの既知産地で生息を再確認できないのが現状である。タイプ産地 (大阪府能勢) の個体群も絶滅した。激減した原因は不明のため、保護対策の目処も立たない。

【参考文献】 58)、59)

執筆者：井上広光 (果樹研究所)

カメムシ目 アブラムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ニシキギヒゲナガアブラムシ *Aulacorthum nishikigi* (Shinji, 1928)

これまで、ニワトコヒゲナガアブラムシの同種異名として扱われてきたが、進士 (1941) の記載からも独立種である。日本固有種。体長 3 mm 前後で、頭部と胸部が濁赤色、腹部が緑色で光沢がある美しいアブラムシ。日本での分布は北海道、東北地方であり、寒地性種と考えられるが、1977 年に栃木県宇都宮市でも得られた。本種はニシキギのみを寄主とする単食性で、ニワトコヒゲナガアブラムシのような寄主転換はしない。栃木県付近が本種の南限と思われ、温暖化の影響 (71) で減少してしまうことが懸念されるアブラムシである。

【参考文献】 60)、100)

執筆者：高橋 滋 (宇都宮大学農学部)

カメムシ目 サンゴアメンボ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## サンゴアメンボ *Hermatobates weddi* China, 1957

東洋区とオーストラリア区に広く分布し、日本ではトカラ列島以南の琉球列島に分布する。楕円形で体長 3.4～4 mm (無翅型のみ)。全体がビロード状の黒色で、毛が密生する。胸部と腹部は癒合し、腹部は小さく後方上部に位置する。雌雄で形態が異なる部分があり、雄の前脚は大きく太くなり、雌の胸背は左右に分かれている。サンゴ礁など海岸岩礁地帯の潮間帯に生息し、干潮時に海面上をカーブを描いて素早く疾走する。海岸の岩礁部が減少したこと (14) や海水の汚れ等 (31) により、産地数ならびに個体数が減少しつつある。

【参考文献】 —

執筆者：林 正美 (埼玉大学教育学部)

カメムシ目 ミズムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミゾナシミズムシ *Cymatia apparens* (Distant, 1911)

日本では北海道から九州にかけて分布する、体長5～6mmの小型のミズムシ。一見コミズムシ類に似ているが、やや細い。顔(頭部腹面)は非常に短く三角形で、口(下唇)の横溝を欠く。前脚の跗節は細長くなり、太い剛毛が列生する。前胸背板には黒色の横帯があり、斑紋パターンはコミズムシ類と基本的に同じである。やや深い池沼など、安定した止水域に生息するが、その密度は高くない。コミズムシ類と異なり、肉食性が強いといわれる。近年減少しつつあるが、その原因として、良好な池沼の減少と水質悪化(12、31)のみならず、外来魚の侵入・捕食(52)の可能性も大きい。

【参考文献】 —

執筆者：林 正美(埼玉大学教育学部)

カメムシ目 ヒラタカメムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オオカバヒラタカメムシ *Aradus herculeanus* Kiritschenko, 1913

ロシア産の標本を基に記載された種で、国内では本州と四国の冷温帯林に分布する。体長約10mmで、同属の中では比較的大型である。また、雌の腹端が後方へ大きく突出することと、触角第3節が乳白色になることで特徴づけられる。最近の検討により、これまでカバヒラタカメムシとして記録された本州および四国産の標本の多くは本種を指すものと判明した。ダケカンバの立枯れに発生したツリガネタケより複数個体が採集されたことがあるが、安定した産地はなく個体数は多くない。

【参考文献】 —

執筆者：長島聖大(伊丹市昆虫館)・庄野美徳(住友化学)

コウチュウ目 オサムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## キベリマルクビゴミムシ *Nebria livida angulata* Banninger, 1949

北海道、本州、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島、中国、シベリア等東北アジアに分布する亜種。種としては広くヨーロッパにまで分布している。体長13～16.5mm、頭部は黒色で複眼間に一對の赤紋をもつ。比較的大きな河川の中・下流域の河川敷や田畑の周辺、池畔等の草地に生息する。昼間は石下に潜み、夜間徘徊して昆虫等の小動物を捕食すると考えられる。かつては全国各地の平地に普通の種であったようだが、近年の記録は激減し、現存産地は少なくなっている。生息環境の改変・消失や河川敷等における外来植物の繁茂が脅威と考えられる。

【参考文献】 1)、67)

執筆者：岸本年郎(自然環境研究センター)

コウチュウ目 オサムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## フタモンマルクビゴミムシ *Nebria pulcherrima* S. Uéno, 1955

本州、四国、九州に分布し、国外では中国、台湾に分布する。体長11～12.5mm、黄褐色の地色に黒色紋をもつが斑紋は変異が大きい。比較的大きな河川の中流域の砂と礫が混じった河原の水際に生息する。昼間は石下に潜み、夜間徘徊して昆虫等の小動物を捕食すると考えられる。かつては全国各地で記録が散見されたが、近年の記録は激減し、現存産地は少なくなっている。河川改修(13)により砂礫地が消失する等、河川環境の改変が大きな影響を与えたと考えられている。

【参考文献】 1)、110)

執筆者：岸本年郎(自然環境研究センター)

コウチュウ目 オサムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## キバナキバナガミズギワゴミムシ

*Armatocillenus aestuarii* S. Uéno & Habu, 1955

本州、四国、九州に分布する日本固有種。4.5mm 程度、大顎が発達し、頭部、前胸背は緑銅色で、上翅は黄褐色で暗色紋をそなえる。海浜性の種で河口付近の潮間帯に生息し、同属の他種が混生しているところでは、本種がより海側に偏って生息する。満潮時は完全に水没した砂中に潜み、干潮時には露出した砂上で活動する。近年、全国的に本種の生息に適した環境が減少しており、消失した産地も多い。生息環境の改変・消失、水質の悪化やヘドロの堆積による潮間帯の汚染が脅威となっている。

【参考文献】 1)、64)

執筆者：岸本年郎（自然環境研究センター）

コウチュウ目 オサムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ツツイキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus tsutsuii* S. Uéno, 1955

本州、屋久島、トカラ列島、奄美大島に分布する日本固有種。体長 3.5mm 程度、発達した大顎には歯をもたず、体は全体に黄褐色。本州の現存する生息地は東海地方の 1 か所が知られるのみ。海浜性の種で潮間帯に生息し、本州では河口付近の岩上に砂が堆積した場所に、南西諸島ではサンゴ礁に生息している。満潮時は完全に水没した水中の岩やサンゴ、付着動物のすきまに潜み、干潮時には露出した場所で活動する。生息環境の改変・消失、水質の悪化やヘドロの堆積による潮間帯の汚染が脅威となっている。

【参考文献】 1)、64)

執筆者：岸本年郎（自然環境研究センター）

コウチュウ目 オサムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## スナハラゴミムシ *Diplocheila elongata* (Bates, 1873)

本州、四国、九州に分布し、国外では中国に分布する。体長 23~24mm、黒色で光沢を欠く。利根川流域ではいくつかの記録があるが、それ以外は局地的に記録があるのみ。近年の記録も少なく、確実に生息している産地は、ほとんど知られていない。灯火に集まることがあるが、詳しい生態は不明。

【参考文献】 127)

執筆者：岸本年郎（自然環境研究センター）

コウチュウ目 オサムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## フトキバスナハラゴミムシ

*Diplocheila macromandibularis* (Habu & Tanaka, 1956)

本州および周辺島嶼に分布する日本固有種。体長 16~17mm、光沢が強く、大顎は短大で著しく左右不相称。これまでに茨城県、山形県飛島、新潟県粟島と佐渡から記録されているのみで、全国的に非常に珍しい種。成虫は大きな大顎で陸貝の殻を破碎して食べているものと考えられているが、生息環境の選好性や生態については不明な点が多い。

【参考文献】 127)

執筆者：岸本年郎（自然環境研究センター）

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オクエゾクロマメゲンゴロウ *Agabus affinis* (Paykull, 1798)

日本では北海道の道東地域のみで確認されており、分布地は狭く根室半島から釧路湿原周辺まで記録されている。生息環境は高層湿原内の浅い水溜りや池などである。分布範囲が狭く生息環境も特殊であることから、農地改良等の開発行為や水質汚濁 (31) 等の影響により生息環境が急速に消失している可能性が指摘される。

【参考文献】 30)、45)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)・吉富博之 (愛媛大学農学部)

コウチュウ目 ゲンゴロウ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## マルガタゲンゴロウ *Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)

北海道～九州に分布する。体長13～14mm、汚黄色で、上翅に密な小黑点紋がある。以前は各地の池や水田に生息する普通種で個体数もかなり多かったが、近年は個体数の減少が著しい。北海道では道北地方を除き広く分布するが、本州産とは形態的に異なるとの指摘もある。近縁のカラフトマルガタゲンゴロウは、サロベツ湿原を中心とした北海道の道北地方のみから記録されており、混生地は知られていない。池や水田等の止水環境の悪化により、他の大型ゲンゴロウ類とともに生息環境が急速に悪化していると考えられる。

【参考文献】 62)、69)、94)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)・吉富博之 (愛媛大学農学部)

コウチュウ目 ミズスマシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ツマキレオナガミズスマシ *Orectochilus agilis* Sharp, 1884

本州～九州に分布するが稀。タイプ産地は熊本県であり、福岡県、高知県四万十川、兵庫県猪名川、東京都多摩川、栃木県蛇尾川などで採集されている。体長6.0～7.2mm、上翅合部の先端が上翅端切断部より内側に位置することにより近似種と区別できる。河川の開発 (13) や護岸工事の影響により、生息環境が急速に悪化している可能性が指摘される。

【参考文献】 71)、85)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)・吉富博之 (愛媛大学農学部)

コウチュウ目 ガムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## クロシオガムシ *Horelophopsis hanseni* Satô & Yoshitomi, 2004

四国、九州、屋久島、奄美大島、沖縄島から記録されており、河口部汽水環境の砂礫地から採集されている。現在のところ幼虫や生態は不明である。本亜科は、本種のほかにニューギニアから知られる1種を含む1属2種で構成され、ガムシ科の中でも原始的な形質を有する特殊な存在であり、学術的にも貴重である。最近沖縄島のタイプ産地では採集されていないなど、急速に生息地が消失している可能性が指摘される。

【参考文献】 5)、94)、147)、150)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)・吉富博之 (愛媛大学農学部)

コウチュウ目 ダルマガムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## アマミセスジダルマガムシ *Ochthebius amami* Yoshitomi & Satô, 2001

奄美大島と沖縄島に分布する。体長 1.9~2.3mm。ホンシュウセスジダルマガムシに似るが前胸背の形が異なり、雌の上翅は後方 1/4 が側方に明らかに突出することが特徴的である。溪流のやや開けた場所に生息するが、個体数はあまり多くない。河川の開発 (13) や護岸工事の影響により、生息環境が急速に悪化している可能性が指摘される。

【参考文献】 149)、152)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)・吉富博之 (愛媛大学農学部)

コウチュウ目 シデムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヤマトモンシデムシ *Nicrophorus japonicus* Harold, 1877

本州、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島、中国、モンゴル、台湾に分布する。体長 14~25mm、触角の先端 3 節が橙色で、上翅の赤紋は会合部に達しない。平地性の種で、河川敷や草原を中心に生息し、小動物の死体に集まり成虫・幼虫ともに腐肉を食べる分解者。かつては各地に普通の種であったが、全国的に近年の記録は減少している。生息環境の改変・消失が大きな原因であると考えられるが、餌となる動物の個体数の減少も影響している可能性が高い。

【参考文献】 127)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 コブスジコガネ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## マルコブスジコガネ *Trox mitis* Barthesar, 1933

北海道、東北、東本州、九州に分布する。体長 7.9~11.0mm。春~秋にかけて出現する。新潟県内のサギコロニーで幼鳥の古い死体やペレットに集まることが知られていたが、近年、サギコロニーが移動し、従来の生息環境は消滅し、個体数が激減した。全国で広く記録はあるが、新潟県周辺の産地以外では非常に稀。各地でサギコロニーが減少していることから、本種の個体群動態も注視すべきである。

【参考文献】 46)、49)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)

コウチュウ目 コガネムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒメキイロマグソコガネ *Aphodius inouei* Nomura, 1942

北海道、本州、対馬およびトカラ列島から沖縄島に分布。国外では朝鮮半島、濟州島、中国、ネパール、中央アジア、モンゴル、ヨーロッパ、北アフリカに分布する。体長 3.0~4.3mm。海岸性の放牧地などの牛糞で見つかることが多く、数日以上経過したやや古い糞で多数得られた報告がある。かつては広域分布種であったが激減し、現在は生息を確認できる産地はほとんどない。7~9月の確認例が多く、灯火に集まる。沖縄島では春に採集された記録がある。海浜近くの牧場が全国的に激減していることが、本種の激減と強く関係していると思われる。

【参考文献】 31)、46)

執筆者：大原昌宏 (北海道大学総合博物館)

コウチュウ目 コガネムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ダイセツマグソコガネ *Aphodius kiuchii* Masumoto, 1984

北海道の大雪山の固有種。体長5.5~6.0mm。生息地は高山帯のハイマツ地帯やガレ場のきわめて限定された地点であり、7~8月に人糞から確認されている。生息地は保護地域内にあるが、生息地域がきわめて局限(61)されているため、非常に脆弱な生息状態と考えられ、注視の必要な種である。

【参考文献】 46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## キバネマグソコガネ *Aphodius languidulus* Ad. Schmidt, 1916

北海道、東本州、四国、九州に分布。国外では朝鮮半島、中国に分布する。体長5.0~7.2mm。放牧地などのオープンな環境に生息し、新鮮な牛糞を好む。灯火にも飛来する。広域分布種であったが、近年放牧地の減少により激減し、生息の確認できていない離島以外ではほとんど見られなくなった。急激に個体数を減らしていることから、注視の必要な種である。

【参考文献】 46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## クロモンマグソコガネ *Aphodius variabilis* Waterhouse, 1875

北海道、本州、四国、九州、対馬に分布。国外では朝鮮半島、中国、シベリア、トルキスタンに分布する。体長4.9~7.3mm。河川敷や放牧地などのオープンな環境に生息し、ウシ、イヌ、ヒトなどの糞に集まる。放牧地の減少により、個体数が激減した。近年、河川敷の犬糞に依存している個体群が再発見されているが、依然個体数の増減を注視すべき種である。冬に出現する種であり、冬季に放牧が行われ難くなっていることも、減少の一因と考えられる。

【参考文献】 38)、46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 タマムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ツヤヒメマルタマムシ *Kurosawaia yanoi* (Y. Kurosawa, 1963)

小笠原諸島に分布する日本固有種。体長5~8mm、暗銅色~紫銅色で頭胸部のみ青緑色の個体が多いが、全体が黒紫青色となる個体もあるほど変異は大きい。成虫はヒメフトモモなどの枝に飛来し、幼虫はシマシャリンバイの枯れ枝を食べる。小笠原諸島に広く分布するが、かつて多く見られた父島と母島では1990年代以降の生息情報がほとんどない。グリーンアノールの捕食圧(52)を強く受けていると思われるとともに、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 40)、51)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 ゴミムシダマシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヤマトオサムシダマシ *Blaps japonensis* Marseul, 1876

本州、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。体長 22mm 程度、全身黒色で重量感のある独特の体型をもっている。平地性の種で、古い木造家屋の床下や納屋の藁屑などの比較的乾燥した場所に見られることが多い。人家周辺に多く、自然の山野ではほとんど見られないため、古い時代に人間活動によって日本に持ち込まれた可能性が示唆されている。本種の生息に適した環境は確実に減少しており、全国的に近年の記録は少ないが、少なくとも近畿地方では細々と残っている地域がある。

【参考文献】 103)、137)

執筆者：岸本年郎（自然環境研究センター）

コウチュウ目 カミキリムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## チャイロヒメカミキリ小笠原亜種 *Ceresium simile simile* Gahan, 1890

小笠原諸島の固有亜種（名義タイプ亜種）。体長 11～18mm で、伊豆諸島や南西諸島方面の亜種とは色彩によって容易に区別できる。弟島、父島、母島に分布し、島嶼により色彩の変化がいくらかある。1980 年代までは父島、母島ともに個体数のごく多かったが、1990 年代後半以降の生息情報は少ない。成虫は夜間に活動し、明るい間はオガサワラビロウなどの枯れ葉に潜む。グリーンアノールの捕食圧（52）を強く受けていると思われる。

【参考文献】 52)、75)、109)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 カミキリムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## クロヒラタカミキリ *Ropalopus signaticollis* Solsky, 1872

極東大陸方面と北海道、本州に分布。体長 10～15mm で、体は全体黒色で平たく、鞘翅の両側は直線状に平行となる。日本では中部地方以北の山間部や内陸盆地などに局地的に分布し、かつては貯木場や道端の薪に多数の個体が集まっていた。しかし、1990 年代後半以降は各産地で衰亡が著しいらしく、生息情報はきわめて少なくなっている。衰亡の原因は明らかにされていないが、広葉樹の伐採が行われなくなってきたことや里山環境の荒廃がその一つかもしれない。

【参考文献】 75)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 カミキリムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## コトラカミキリ *Plagionotus pulcher* (Blessig, 1872)

極東大陸と北海道、本州に分布。体長 12～15.5mm で、背面には独特な斑紋をもつ。日本では中部地方以北の内陸盆地や日本海側を中心にやや局地的に分布し、かつては貯木場や道端の薪に多数の個体が集まっていた。しかし、1990 年代後半以降は各地で衰亡が著しいらしく、ときにまとまった発生を見るものの、生息情報は少ない。衰亡の原因は明らかにされていないが、広葉樹の伐採が行われなくなってきたことや里山環境の荒廃がその一つかもしれない。

【参考文献】 75)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 カミキリムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ケハラゴマフカミキリ *Mesosa hirtiventris* (Gressitt, 1937)

小笠原諸島に分布する日本固有種。体長 11.5~23mm で、鞘翅にはやや不明瞭な縦スジ紋を備え、雄の触角末端節の端はカギ状に曲がる。父島と母島に分布するが、弟島にも生息の可能性がある。1980年代までは父島、母島ともに個体数が比較的多かったが、1990年代後半以降の生息情報はごく少ない。成虫は伐採木や枯れ枝に集まり、幼虫はギンネムなど各種広葉樹を食する。とくに中・小型個体はグリーンアノールの捕食圧 (52) を強く受けていると思われる。

【参考文献】 75)、109)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ミチノクケマダラカミキリ *Agapanthia sakaii* Hayashi, 1982

本州の東北地方と中部地方の一部に分布する日本固有種。北海道と極東大陸に分布するケマダラカミキリにごく近似し、しばしばその1亜種として扱われる。体長 10~15.5mm で、背面には独特な斑紋をもち、成虫はハンゴンソウやヨモギから発見される。本州北部にかなり局地的に分布するが、一部を除けば地域絶滅し、あるいは衰退が著しい。衰退の原因としては、ヨモギやハンゴンソウが生育するような草地・林縁環境の減少がその一つと考えられる。

【参考文献】 76)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## オガサワラビロウドカミキリ *Acalolepta boninensis* Hayashi, 1971

小笠原諸島に分布する日本固有種。体長 13~26.5mm で、鞘翅は粗大に点刻され、その点刻部は無毛、背面を覆う微毛がまばらという特徴をもつ。父島と母島、妹島に分布するが、2000年代以降の生息情報は母島の一部を除けばごく少ない。成虫は明るい間はアコウザンショウやコブガシなどの枯れ葉に潜み、幼虫はムニンヤツデなどを食する。とくに中・小型個体はグリーンアノールの捕食圧 (52) を強く受けていると思われる、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 75)、84)、109)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ケズネケシカミキリ *Phloeopsis lanata* (N. Ohbayashi, 1976)

小笠原諸島に分布する日本固有種。体長 4~6mm で、斑紋はきわめて変化に富み、脛節には特徴的な絹状白色長毛をもつ。賀島、兄島、父島、母島、それに火山列島に分布し、母島ではきわめて多数が得られていたが、2000年代になって激減した。成虫はクスノキ科の新しい枯れ枝に集まる。グリーンアノールの捕食圧 (52) を強く受けていると思われるとともに、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。火山列島産は母島産といくらか形態を異にする。

【参考文献】 52)、75)、109)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)



コウチュウ目 ハムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## クロヘリウスチャハムシ *Pyrrhalta nigromarginata* Jacoby, 1885

中国南部と日本に分布する。体長4.2mm前後で、背面は灰黄褐色、鞘翅は会合部と側縁部に細い黒条をもつ。ゴマギを寄主植物とする。日本では局地的な分布を示し、神奈川県箱根、東京都、静岡県（未発表）から知られているにすぎない。箱根では健全に生息しているが、ふしぎなことにごく限られたゴマギだけに発生しているだけなので、発生木の状況次第で壊滅状態になることが懸念される。

【参考文献】 113)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 ゾウムシ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒメカタゾウムシ父島亜種

*Ogasawarazo rugosicephalus rugosicephalus* (Kono, 1928)

小笠原諸島の父島列島に分布する日本固有種。体長5～7mm程度。父島において、かつては普通種で、広域に分布していたが、グリーンアノールによる捕食の影響（52）によって激減し、現在の生息域はきわめて限定されている。グリーンアノールの侵入していない兄島、弟島では個体数は非常に多い。成虫は各種樹木の葉の表面を齧るように食べ、食痕は特徴的で明瞭。幼虫や蛹は土壌中から発見されるが、生態についてはほとんど未知。

【参考文献】 63)

執筆者：岸本年郎（自然環境研究センター）

ハチ目 コマユバチ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウマノオバチ *Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre, 1898)

本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、台湾、ラオス、インドから記録されている。体長15～24mmで、産卵管がきわめて長い。分布は局地的で、確認される産地が減少している。最近の報告では、岡山県、茨城県、神奈川県などから記録がある。

【参考文献】 87)、129)

執筆者：多田内 修（九州大学農学研究院）

チョウ目 セセリチョウ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ヒメイチモンジセセリ *Parnara bada* (Moore, 1878)

奄美諸島以南に分布し、国外ではインド～東南アジア、オーストラリアに広く分布する。小型のセセリチョウで、翅表は黒褐色、裏面は黄褐色で、小さな白紋がある。近年は奄美諸島では記録がなく、沖縄諸島以南でも減少が著しい。幼虫の食草がイネなどのイネ科植物であるため、生息地となる水田などの減少と農薬（殺虫剤）の使用（32）が、減少の主な原因ではないかと推定されている。

【参考文献】 104)

執筆者：藤井 恒（日本チョウ類保全協会）

チョウ目 タテハチョウ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice japonica* (Ménétrières, 1857)

北海道、本州、四国、九州に分布する。中型のヒョウモンチョウ。翅表は橙色で多数の黒色の斑紋がある。オオウラギンスジヒョウモンに似るが、後翅裏面外半部の色調がより淡いことなどから区別できる。幼虫の食草はスマシ類であり、採草地、農耕地周辺、河川堤防、疎林などの草原に生息する。草原の管理方法の変化や管理放棄 (53) による草原環境の変化によって、近年急激に減少している。

【参考文献】 104)

執筆者：中村康弘 (日本チョウ類保全協会)

チョウ目 タテハチョウ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## カラフトヒョウモン *Clossiana iphigenia* (Graeser, 1888)

北海道に分布し、国外では中国東北部、朝鮮半島北部、ロシア東北部、サハリンに分布。小型のヒョウモンチョウ。翅は橙色で、多数の黒紋がある。後翅の裏面外縁部に三角形の銀白色紋が並んでいるのが特徴。日本では北海道の石狩低地以東に分布しているが、近年、特に分布域の南西部で著しく減少している。衰亡の原因としては、生息地となる森林の管理がされなくなった (53) ことや、近縁種との競争などが考えられる。

【参考文献】 104)

執筆者：藤井 恒 (日本チョウ類保全協会)

チョウ目 ジャノメチョウ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シロオビヒメヒカゲ札幌周辺亜種

*Coenonympha hero neoperseis* Fruhstorfer, 1908

北海道の定山溪付近にのみ分布する日本固有亜種。小型のジャノメチョウ。翅表は褐色で、裏面外縁部の眼状紋列の内側に白帯がある。北海道東部には道東亜種が分布するが、本亜種は道東亜種よりも裏面の白帯が狭い。道東亜種は、近年、道路に沿って分布を拡大しており、道央部でも見られるようになった。一方、本亜種は豊平川上流域のみに生息するが、生息環境の悪化や乱獲 (41) などによって、近年、著しく減少している。また、分布を拡大しつつある道東亜種と、近い将来、交雑してしまうことも危惧される。

【参考文献】 104)

執筆者：藤井 恒 (日本チョウ類保全協会)

チョウ目 ジャノメチョウ科

NT (準絶滅危惧) [新規掲載]

## シロオビヒカゲ *Lethe europa pavida* Fruhstorfer, 1908

国内では八重山諸島のみに分布し、国外ではインド～東南アジアにかけて広く分布する。中型のヒカゲチョウ。翅は黒褐色で、裏面には眼状紋列がある。雌の前翅に白い帯があるのが特徴。幼虫の食草であるホウライチクやリュウキュウチクなどの竹林に生息するが、石垣島などでは、農地改良や宅地開発 (23) などによって生息地が減少している。

【参考文献】 104)

執筆者：藤井 恒 (日本チョウ類保全協会)

ゴキブリ目 ホラアナゴキブリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キカイホラアナゴキブリ *Nocticola uenoi kikaiensis* Asahina, 1974

琉球列島に分布する日本固有種ホラアナゴキブリの喜界島亜種。真洞窟性で、体長 4.0~4.5mm の微小ゴキブリ。乳白色で、脆弱な体をしている。沖縄本島亜種などに似るが、複眼の退化傾向は完全消失までには至らない。翅はより退化している。少数の個体が知られるのみ。石灰洞から採集されているが、観光洞化による人の踏みつけ (51) や照明設置、洞窟の乾燥化には弱く、環境の悪化が心配される。

【参考文献】 6)、7)

執筆者：山崎柄根 (東京都立大学名誉教授)

ゴキブリ目 ホラアナゴキブリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ミヤコホラアナゴキブリ *Nocticola uenoi miyakoensis* Asahina, 1974

琉球列島に分布する日本固有種ホラアナゴキブリの宮古島亜種。独立種の可能性もある。真洞窟性で、体長約 5mm の微小ゴキブリ。白色で、比較的脆弱な体をしている。1969年と1972年に採集されているが、その後の記録がない。複数の石灰洞から採集されているものの、少数の個体が知られているのみである。この採集された時期より後に、ひとつの洞窟は観光洞になり、破壊を受け、個体数が著しく減少したとされている。

【参考文献】 6)、7)

執筆者：山崎柄根 (東京都立大学名誉教授)

ゴキブリ目 ホラアナゴキブリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ホラアナゴキブリ *Nocticola uenoi uenoi* Asahina, 1974

琉球列島に分布する日本固有種の基亜種で、沖永良部島、与論島、沖縄本島の複数の石灰洞から採集されている。真洞窟性のゴキブリ。微小で、体長 4.0~5.0mm。白色で、脆弱な体をしている。眼の退化傾向が著しい。1958年と1972年に集中して採集されているが、それ以後の記録がない。洞窟の観光洞化による人の踏みつけ (51)、照明設置からの光の影響、洞窟の乾燥化などに弱く、環境の悪化が心配される。

【参考文献】 6)、7)

執筆者：山崎柄根 (東京都立大学名誉教授)

ゴキブリ目 チャバネゴキブリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ミヤコモリゴキブリ *Symploce miyakoensis* Asahina, 1974

琉球列島の宮古島に分布する日本固有種。褐色の小さいゴキブリで、体長 13mm 程度。好洞窟性種と思われ、石灰洞から採集されている。同属のキチャバネゴキブリに近縁のものと考えられる。この虫が採集された洞窟のうち、一部のものは観光洞化され、照明が付けられたりして、その環境が劣悪になっており、生息状況が心配される。

【参考文献】 6)、7)

執筆者：山崎柄根 (東京都立大学名誉教授)

ゴキブリ目 チャバネゴキブリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## エラブモリゴキブリ *Symploce okinoerabuensis* Asahina, 1974

琉球列島沖永良部島に分布する日本固有種。体は小型で、雄は15 mm、雌で13.5 mmと記録されている。好洞窟性の種で、採集された個体数はきわめて少ない。同属のキチャバネゴキブリに似るが、体が小さいこと、前胸背板や翅がより狭いことなどから区別される。採集例が少なく、分布状況が鮮明でないが、石灰洞内における生息場所の、人による踏みつけなどによる(51)、環境悪化が心配される。

【参考文献】 6)、7)

執筆者：山崎柄根（東京都立大学名誉教授）

バッタ目 バッタ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## マボロシオオバッタ *Ogasawaracris gloriosus* Ito, 2003

小笠原諸島のみ分布する種。父島と母島に分布する。大型のバッタで、体長（翅端まで）は雄で50 mm前後、雌で75 mmほど。全身緑色。これまで数個体しか得られておらず、1984年以後の採集例がない。生態もよく分かっていない。絶滅したのではないかという考え方もあるが、今後さらなる情報が望まれる。

【参考文献】 36)

執筆者：山崎柄根（東京都立大学名誉教授）

ガロアムシ目 ガロアムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## チュウジョウムシ(メギシマガロアムシ) *Galloisiana chujoi* Gurney, 1961

日本固有種。瀬戸内海の香川県高松沖に浮かぶ女木島に分布する。好洞窟性の種。体長21 mm。色彩は明るい褐色の虫。複眼はまったく欠いている。1950年代に雌1頭が採集されているが、これ以後の記録がない。現地の洞窟は現在観光地化しており、生息場所であったところは人に踏まれ(51)、環境が悪化している。

【参考文献】 12)、125)

執筆者：山崎柄根（東京都立大学名誉教授）

チャタテムシ目 ケブカチャタテ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ホソヒゲチャタテ *Kodamaius brevicornis* Okamoto, 1907

日本固有種で、本邦唯一のホソヒゲチャタテ亜科（*Kodamainae*）の種である。体長4.3 mm。本種は、1903年7月に明石で採集された1雌と1906年10月に京都で採集された2雌個体に基づいて、1907年に新種として記載されている。一時、台湾産の *K. brevicornis* と同種と見なされていたが、タイプ標本の検討の結果、互いに独立種であることが確認されている。本種は1907年の原記載以来、100年以上にわたって追加の標本が採集されておらず、また過去の記録もきわめて限定的で、生息環境等もまったく不明である。

【参考文献】 156)

執筆者：吉澤和徳（北海道大学農学研究院）

カメムシ目 アブラムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ムクロジヒゲマダラアブラムシ *Tinocallis insularis* (Takahashi, 1927)

これまで、日本、中国、台湾から記録されている。ムクロジのみを寄主とする、体長 1.5 mm 前後で白色の小型のアブラムシ。1927 年に台湾で採集された個体で記載され、後に中国や東京でも確認された。その後、1981 年に栃木県で得られ、本種が見られたムクロジの老木では、現在でも少ないながら寄生が確認できる。おそらく、ムクロジの分布から栃木県が本種の北限と思われ、ムクロジの減少 (11) とともに姿を消してしまう可能性がある。

【参考文献】 24)、106)

執筆者：高橋 滋 (宇都宮大学農学部)

カメムシ目 アブラムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ケヤキワタムシ *Hemipodaphis persimilis* Akimoto, 1983

ケヤキに葉巻型ゴールを形成するアブラムシで、栃木県と北海道から報告されている。ケヤキにゴールを形成するアブラムシのなかに、他に葉巻型ゴールを作る種は、日本では知られていない。採集地は 2 地点のみで、分布がきわめて限られている。個体数が少なく、ゴールは数年おきに発見される。近似の種は、コーカサス地方のケヤキおよびシチリア島のケヤキに葉巻ゴールを形成することが知られている。本種は寄主転換性であるが、2 次寄主は不明。ゴール内において、アブラムシのコロニーは 6～10 月近くまで継続する。

【参考文献】 2)

執筆者：秋元信一 (北海道大学農学研究科)

カメムシ目 コオイムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## タイワンコオイムシ *Diplonychus rusticus* (Fabricius, 1781)

東南アジアには普遍的に分布するが、琉球列島では沖縄島と与論島だけから知られる。体長 15～19mm。沖縄島では 1950 年代に金武町で、与論島では 1960 年代前半に採集された、その後の情報は一切なかったが、1990 年頃に恩納村での目撃情報がある。しかし、近年の確認記録はまったくなく、絶滅が懸念される。その原因として、土地造成や耕作地化による池沼の激減等 (23、31、32) が考えられる。

【参考文献】 21)

執筆者：林 正美 (埼玉大学教育学部)

カメムシ目 ミズムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## チシマミズムシ *Arctocorisa kurilensis* Jansson, 1979

千島～カムチャッカはじめロシア極東から記載された種で、日本では北海道の大雪山と本州北部の八幡平だけから確認されている。やや大型で、体長は 8～9.5mm。細長い体形だが、中央部の幅がやや狭くなる。ミツガシワなどの抽水植物がある池沼の浅瀬に生息する。産地でもいくつかの池沼に限って見られ、生息環境から判断すると、水域環境の変化に脆弱であることが推察される。

【参考文献】 16)、23)

執筆者：林 正美 (埼玉大学教育学部)

カメムシ目 ミズムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オオメミズムシ *Glaenocoris propinqua cavifrons* (Thomson, 1869)

全北区の亜寒帯やツンドラなど寒冷地に広く分布し、日本では本州北部の八幡平だけから確認されている。体長8～9mmのやや大型のミズムシで、体は細長いが頭部は大きく、複眼は球形に近い。前脚附節の形状は特異的で、他のミズムシ類と容易に区別できる。水生植物が乏しい限られた池沼に生息し(61)、密度もきわめて低い。分布状況、生態についての詳しい情報はないが、環境の変化にきわめて脆弱な種と考えられる。

【参考文献】 23)

執筆者：林 正美 (埼玉大学教育学部)

カメムシ目 サシガメ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ハリサシガメ *Acanthaspis cincticrus* Stål, 1859

本州、四国および九州から記録があり、国外ではインド、ミャンマー、中国、韓国から知られる。体長は14.5～16.0 mmで、一様に黒色を呈す。前翅の乳白色の縦帯が特徴的なサシガメである。地表面が露出した丈の低い草本類からなる草原に生息するが、本種の食餌となる、各齢期の体サイズに対応した様々な大きさのアリ類も同時に生息することが本種の存続に必須のようである。このような生息地の減少・局地化(16)が本種の個体数減少に影響していると考えられる。近年では、数か所でしか本種の生息が確認されていない。

【参考文献】 —

執筆者：石川 忠 (東京農業大学農学部)

カメムシ目 サシガメ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヤエヤマサシガメ *Ectomocoris flavomaculatus* (Fabricius, 1803)

東洋区に広く分布するが、国内では八重山諸島に限られる。体長17.0 mm内外の大型種である。体は黒色で、頭部の前部、触角、口吻、脚、腹部結合板は黄褐色を呈すほか、前翅革質部の黄色筋状斑紋が美しい。八重山諸島では非常に珍しく、採集例はきわめて少ない。そのため詳しい生息環境は分かっていないが、近縁種が草本類に覆われた湿地にしばしば見られることから、同様な環境を好むと考えられる。生息環境の把握もままならないまま、近年の環境変化(54)により本種の生存が脅かされている。

【参考文献】 —

執筆者：石川 忠 (東京農業大学農学部)

カメムシ目 ヒラタカメムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オオチャイロヒラタカメムシ *Aradus gretae* Kiritshenko, 1955

ロシア極東部の標本を基に記載された種で、国内では本州の秋田、茨城、奈良、岡山の各県から採集されている。体長約11 mmと日本産本属中の最大種である。褐色と淡褐色のコントラストが鮮やかな美麗種で、他種と容易に区別される。触角第1～2節は黄褐色、第3～4節は黒褐色。また触角第2節は第3節よりも若干長い。モミの倒木上より採集されたことがあり、また既知の産地はいずれもモミの生育する森林である。モミの生育環境に強く依存する可能性は高いものと思われるが個体数はきわめて少なく、詳しい生態は不明である。

【参考文献】 —

執筆者：長島聖大 (伊丹市昆虫館)・庄野美德 (住友化学)

アミメカゲロウ目 センブリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヤマトセンブリ *Sialis yamatoensis* Hayashi & Suda, 1995

本州のみに分布する日本固有種。止水性種であり、平地から丘陵地の湧水に涵養される湿地や池沼に極めて局地的に生息する。生息地の水質汚濁 (31) や埋立て (23)、ゴルフ場造成 (21) などの大規模開発によってすでに多くの生息地が失われたと推測され、現在、栃木、東京、神奈川、兵庫などの各都県のごく限られた地域でのみ生息が確認されている。東京都の生息地は都条例による里山保全地域に指定され、地域保全団体による生息環境の維持管理やモニタリングによる保全の取り組みがなされている。

【参考文献】 44)

執筆者：須田真一（日本蜻蛉学会）

コウチュウ目 ダルマガムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ニッポンセスジダルマガムシ *Ochthebius nipponicus* Jäch, 1998

伊豆半島の海岸から採集された2個体が知られるのみであったが、沖縄島と宮古島からも記録され、本州では茨城県と福島県の海岸から追加確認された。現在のところ、福島県が北限産地である。前胸背の側縁は基部が深くえぐられ、前方に向かって顕著に広がる。体は比較的平ら。生息環境は、海岸の砂でできた岩壁に淡水の滴り落ちる場所である。波が直接当たる場所には生息していないようだ。生息環境が特殊であり、岩壁の護岸等の影響により生息環境が急速に消失している可能性が指摘される。

【参考文献】 113)、151)、152)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）・吉富博之（愛媛大学農学部）

コウチュウ目 マルハナノミ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ホソキマルハナノミ *Elodes elegans* Yoshitomi, 1997

本州（新潟以南）、四国、九州のブナ帯下部の比較的良好な樹林環境で採集されるが、個体数は一般的に少ない。成虫は灯火に集まることもある。幼虫は溪流に生息すると考えられるが、生態は不明。河川の開発 (13) や護岸工事の影響により、生息環境が急速に悪化している可能性が指摘される。

【参考文献】 145)、148)、155)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）・吉富博之（愛媛大学農学部）

コウチュウ目 コブスジコガネ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キョウトチビコブスジコガネ *Trox kyotensis* Ochi & Kawai, 2000

現在までに判明している生息地は京都府と大分県のみ日本固有種。京都府内の河川敷にあるサギのコロニーで見られた。体長5.3~6.1mm。春に羽毛や糞、鳥の死体などに集まる。河川敷につくられたサギのコロニーが生息環境であるため、洪水などの自然要因による攪乱や、人為開発の影響を受けやすく、個体数の増減には注視が必要な種である。

【参考文献】 46)、55)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## セマルオオマグソコガネ *Aphodius brachysomus* Solsky, 1874

北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島に分布。国外では朝鮮半島、中国、シベリアに分布する。体長7.5～11.0mm。放牧地などのオープンな環境に生息し、新鮮な牛糞、馬糞に集まる。現在、個体数が激減し、北海道、九州をのぞき、良好な生息環境はきわめて少なくなっている。春に個体数を増やす。春に出現する種であり、冬～春にかけて放牧が行われ難くなっていることも、減少の一因と考えられる。

【参考文献】 46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ダルママグソコガネ *Mozartius testaceus* Nomura & Nakane, 1951

本州、四国に分布する日本固有種。本州亜種と四国亜種に分けられることがある。体長5.2～5.4mm。モグラやネズミなどの地下性動物の糞に依存している可能性が高い。本州では千葉県から広島県まで記録があるが、産地はきわめて局所的である。四国では香川県を除き広く分布するが、産地は局所的である。地下性動物に依存する特異な生活をしていることから、生態については情報不足であるが、産地は局所的であり、個体群の動態を注視すべき種である。

【参考文献】 46)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アカマダラコガネ *Poecilophilides rusticola* (Burmeister, 1842)

北海道、本州、四国、九州に分布。国外では済州島、朝鮮半島、シベリア東部、モンゴルに分布する。体長14～20mm。分布は広く、里山の雑木林のクヌギやコナラの樹液に集まるのが普通であったが、里山雑木林の減少などから個体数が激減した。近年、猛禽類の巣の中から幼虫と成虫が確認されており、猛禽類に強く依存した種であることが示唆されている。猛禽類の減少がそのまま本種の減少に関係している可能性が高く、詳細な生態の解明を行いながら、個体数の動態を注視すべき種である。

【参考文献】 96)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）

コウチュウ目 コガネムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オキナワカブトムシ *Trypoxylus dichotomus takarai* (Kusui, 1976)

沖縄諸島の固有亜種。体長30.3～50.1mm。いずれの島でも生息個体数は少なく、発生時期も短いため生態面では不明な点が多い。形態的、遺伝的な面でも本土亜種や大陸産の基亜種とは大きく異なる独自性の高い亜種である。里山に生息する本土亜種とは異なり、生息地は成熟林に近い状態の良い森林に限られ、いずれの生息地においても島という特殊な環境のために森林面積が少ない上に、開発による森林環境の破壊(11)が著しい。沖縄島では近年、人為的に移入された本土亜種も確認され、本亜種との遺伝的交雑(57)による絶滅が懸念される。

【参考文献】 83)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）



コウチュウ目 ヒラタドロムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒゲナガヒラタドロムシ *Nipponeubria yoshitomii* Lee & Satô, 1996

タイプ産地の愛知県豊田市（面ノ木峠とその周辺）のほか、三重県と島根県から知られている種である。幼虫の生息環境はブナ林内の細流脇、染み出し水等である。生態等は不明であるが、幼虫は染み出し水周辺の落葉を食していると考えられる。生息環境が特殊であり、岸壁の護岸等の影響により生息環境が急速に消失している可能性が指摘される。

【参考文献】 20)、146)、153)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）・吉富博之（愛媛大学農学部）

コウチュウ目 ヒメドロムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ハガマルヒメドロムシ *Optioservus hagai* Nomura, 1958

北九州市小倉より記載され、これまで山陰（島根県）および九州（福岡県）の数河川から知られている。体長2.2~2.5mm、楕円形で、鞘翅の肩と先端に赤い紋を有する。本属内では背面が盛り上がっていることが特徴。丘陵地を流れる比較的小さな流れで採集されており、個体数は少なく、分布は限定的である。河川の開発（13）や護岸工事以外に、ダムや堰等の河川構造物の影響により、生息環境が急速に悪化していると考えられる。

【参考文献】 20)、79)、82)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）・吉富博之（愛媛大学農学部）

コウチュウ目 タマムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オガサワラナガタマムシ *Agrilus boninensis* Y. Kurosawa, 1963

小笠原諸島に分布する日本固有種。体長7~9.5mmで、背面は紋をもたず、鞘翅は非常に細い。成虫はムニンエノキに集まる。兄島と父島、母島に記録があり、かつては父島と母島では多数が見られた。1990年代以降は生息情報があまりないようであるが、詳しくは分かっていないので、生息情報を早急に集積する必要がある。グリーンアノールの捕食圧（52）を強く受けていると思われるとともに、外来樹種の優占による森林環境の変化も憂慮される。

【参考文献】 40)、51)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 ジョウカイモドキ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## イゾジョウカイモドキ *Laius asahinai* Nakane, 1955

本州~九州に分布し、分布の北限は、太平洋岸では千葉県房総半島、日本海側では新潟県、南限は屋久島である。屋久島より南には近縁のトカライソジョウカイモドキが分布する。体長4mm前後、青黒色で海岸の岩礁に生息する。生態は詳細には調べられていないが、岩礁に生息する小動物を捕食していると考えられる。満潮時には海水中に没している。生息環境が特殊であり、岸壁の護岸等の影響により生息環境が急速に消失している可能性が指摘される。

【参考文献】 17)、33)、50)、70)、142)

執筆者：大原昌宏（北海道大学総合博物館）・吉富博之（愛媛大学農学部）

コウチュウ目 ホソカタムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アバタツヤナガヒラタホソカタムシ *Penthelispa sculpturatus* Sharp, 1885

本州、八丈島、対馬に分布し、国外では台湾に分布する。平地性の種のように、マツ等針葉樹の枯木の樹皮下から見出される例が多い。タイプ産地の箱根塔の沢では原記載以来、確認がなされておらず、近年は三重県で複数の記録があるものの、全国的には記録がきわめて少ない。平地のマツ林にその生息の中心があるとすれば、全国的に生息地は減少していると考えられ、マツクイムシ対策の薬剤散布の影響等の可能性も考えられるが詳細は不明。

【参考文献】 25)

執筆者：岸本年郎（自然環境研究センター）

コウチュウ目 ハナノミ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## チチジマヒメハナノミ *Ermischiella chichijimana* Nomura, 1975

小笠原諸島の父島からのみ知られる日本固有種。体長 3.5mm 前後で、体は金色光沢をもった暗色毛で被われる。採集例の少ない種で詳しい生息状況は不明であるが、2000 年代はごくわずかな個体が採集されているにすぎない。成虫は夜間に活動するらしく、明るい間は多少とも暗い林内のオガサワラビロウなどの枯れ葉に潜む。グリーンアノールによる捕食圧 (52) が大きいと思われる。

【参考文献】 80)、107)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 ハナノミ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ハハジマヒメハナノミ *Ermischiella hahajimana* Nomura, 1975

小笠原諸島の母島からのみ知られる日本固有種。体長 3~3.5mm 前後で、体は金色光沢をもった暗色毛で被われ、雄の触角第 4 節は 3 節の 2 倍の長さがある。もともとあまり採集例が多くなく、詳しい生息状況は不明であるが、2000 年代はごくわずかな個体が採集されているにすぎない。成虫は夜間に活動するらしく、明るい間は多少とも暗い林内のオガサワラビロウなどの枯れ葉に潜む。グリーンアノールによる捕食圧 (52) が大きいと思われる。

【参考文献】 80)、107)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 ハナノミ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ズグロヒメハナノミ *Ermischiella nigriceps* Nomura, 1975

小笠原諸島の父島と西島、弟島（未発表）だけに知られる日本固有種。体長 3.5mm 前後で、体は赤褐色、頭部は黒褐色を呈する。採集例の少ない種で詳しい生息状況は不明であるが、2000 年代はごくわずかな個体が採集されているにすぎない。成虫は夜間に活動するらしく、明るい間は多少とも暗い林内のオガサワラビロウなどの枯れ葉に潜む。グリーンアノールによる捕食圧 (52) が大きいと思われる。

【参考文献】 80)、107)

執筆者：高桑正敏（神奈川県立生命の星・地球博物館）

コウチュウ目 ハナノミ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ボニンヒメハナノミ *Falsomordellistena formosana boninensis* Nomura, 1975

小笠原諸島の母島だけに知られる日本固有亜種で、名義タイプ亜種が台湾に産する。体長5mm前後で、鞘翅肩部が赤褐色なことからはほかの小笠原産同属種とは容易に区別できる。記載当時から採集例が少なく、最近の生息状況は明らかではないが、2000年代における生息情報はあり。成虫は林床や林縁の葉上に見かけ、敏捷に活動するが、雌は枯れ木に産卵すると考えられるので、その際はとくにグリーンアノールによる捕食圧(52)が大きいと思われる。

【参考文献】 80)、107)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 ゴミムシダマシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アラメゴミムシダマシ *Derosphaerus foveolatus* (Marseul, 1876)

九州のみから知られている種。国外からは知られていない。体長14~18mm、上翅の点刻が非常に大きく目立ち、日本産種には類似するものがない顕著な種。原記載では「九州」から記録され(詳細な産地は不明)、その後、長崎市内の公園から一例の記録があるのみのきわめて珍しい種。原記載以来唯一の例では夜間に、広葉樹の生木の太い枝に止まっていたのが確認されている。生態についてはまったく不明である。

【参考文献】 28)

執筆者：岸本年郎 (自然環境研究センター)

コウチュウ目 カミキリムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヤエヤマクロスジホソハナカミキリ

*Parastrangalis ishigakiensis* Hayashi, 1970

南西諸島の固有種。体長6~8.5mmで、鞘翅には3本の縦の太い黒条が走る。八重山諸島石垣島だけに知られ、かつては於茂登岳山中にて多数の個体が採集されていたが、1980年代後半以降はごく少数の個体が得られるにすぎないという。成虫は3~4月に出現し、日陰の花、とくにヤエヤマコンテリギの花に飛来する。生息地における樹林環境にはめだつた変化が認められないが、生息情報を早急に集積する必要がある。

【参考文献】 75)、84)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アカオニアメイロカミキリ *Obrium cantharinum shimomurai* Takakuwa, 1984

北海道の固有亜種で、名義タイプ亜種はアジア大陸北部に分布する。体長6.5~8mmで、体は強く赤みがかかる。1980~1981年に網走支庁生田原にて採集された12頭の標本を基に記載され、その前後にも多数が得られていたらしいが、1990年代後半以降は生息情報がないらしい。成虫は7月下旬頃に出現し、主にカエデ類の枝のスイーピングで得られている。生息地における樹林環境には目立つた変化が認められないが、生息情報を早急に集積する必要がある。

【参考文献】 75)、84)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ケズネチビトラカミキリ *Amamiclytus nobuoi* Ohbayashi, 1964

南西諸島の固有種。体長 3.8~5.3mm で、体には点刻が少なく、強い光沢をもつ。奄美大島とトカラ列島悪石島に分布し、それぞれ別亜種とされる。1990 年代後半以降の生息情報はほとんどないようである。成虫は 6~7 月に出現し、各種の花に飛来する。奄美大島では伐採がかなり進んだとはいえ、本種に好適な樹林環境はまだ残されているので、実際に本種がどのような生息状態にあるのかを調査する必要がある。悪石島亜種は原記載以降の生息情報を聞かない。

【参考文献】 75)、84)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ススキサビカミキリ *Pterolophia kubokii* Hayashi, 1976

台湾と南西諸島に分布する。体長 10~12.5mm で、鞘翅には不明瞭な 2 対の縦スジ紋をもつ。日本では石垣島と西表島だけから知られているが、1990 年代後半以降の生息情報はほとんどないようである。成虫は 4~6 月に出現し、ススキ類から得られる。石垣島北部の平久保周辺が産地として有名であったが、ここでも最近は得られていないようなので、生息情報を早急に集積する必要がある。

【参考文献】 75)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## クロツヤアラゲカミキリ *Anaesopogonius piceonigris* Hayashi, 1972

南西諸島に分布する日本固有種。体長 7~10mm で、体は全体ほぼ黒栗色、鞘翅には密な褐色微毛のほか長立剛毛を生やす。奄美大島だけに記録があり、1970 年 6~7 月につる性植物から採集された 4 頭しか知られていない。奄美大島では伐採がかなり進んだとはいえ、本種に好適であろうと思われる樹林環境はまだ残されているので、再発見が期待される。なお、2008 年に 1 頭が得られたという情報もある。

【参考文献】 75)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アマミハリムネモモブトカミキリ *Ostedes inermis densepunctata* Hayashi, 1962

南西諸島の固有亜種で、名義タイプ亜種などほかの亜種が中国南部と台湾に分布する。体長 7~10.5mm で、前胸側面突起は強大、鞘翅には小黒点を密にちりばめるほか、基部や中央、後方に不明瞭な黒紋を現す。奄美大島と徳之島だけから知られているが、奄美大島では 1990 年代後半以降の生息情報はほとんどないようである。成虫は 5~7 月に出現し、伐採木に集まる。本種に好適な樹林環境はまだ残されているが、生息情報を早急に集積する必要がある。

【参考文献】 75)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

コウチュウ目 カミキリムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シロスジトゲバカミキリ *Rondibilis femorata* Gressitt, 1938

台湾と南西諸島に分布する。体長4.5~8mmで、鞘翅には縦の鎖線状の白条をもつ。日本では沖縄島、石垣島、西表島、与那国島から知られているが、1990年代後半以降の生息情報はほとんどないようである。成虫は3~6月に出現し、ススキ類の焼かれた部分に集まるという特異な習性がある。石垣島北部の平久保周辺が産地として有名であったが、ここでも最近は得られていないようなので、生息情報を早急に集積する必要がある。

【参考文献】 75)

執筆者：高桑正敏 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

ハチ目 ナギナタハバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## チャイロナギナタハバチ *Xyelecia japonica* Togashi, 1972

日本固有種。体長5mmで、大台ヶ原から発見された。分布は局地的。現在、生息が確認されているのは、長野県、奈良県、愛媛県のみ。*Xyelecia* 属は日本と北米西部に1種ずつ分布し、生物地理学的に興味深い。

【参考文献】 115)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ヒラタハバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シロズヒラタハバチ *Chrysolyda leucocephala* (Takeuchi, 1938)

日本固有種。北海道、本州に分布する。*Chrysolyda* 属は極東アジア固有で1種のみを含む。近縁属は中近東に分布。分布は局地的で、確認される産地が減少している。現在、生息が確認されているのは、北海道、神奈川県、石川県、京都府、福岡県。

【参考文献】 101)、112)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ハバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒダクチナガハバチ *Nipponorhynchus bimaculatus* Naito, 1973

日本固有種。本州に分布する。体長3~5mmで、岐阜県から発見され分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、栃木県、岐阜県、奈良県のみ。

【参考文献】 68)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ハバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## クチナガハバチ *Nipponorhynchus mirabilis* Takeuchi, 1941

日本固有種。本州、九州に分布する。分布は局地的で、確認される産地が減少している。現在、生息が確認されているのは、栃木県、神奈川県、京都府、福岡県のみ。

【参考文献】 116)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 セダカヤセバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キンケセダカヤセバチ *Pristaulacus rufipilosus* Uchida, 1932

日本固有種。北海道に分布する。体長 16mm で、札幌から記載された。分布は局地的で、確認される産地が減少している。

【参考文献】 124)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 コンボウヤセバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## オガサワラコンボウヤセバチ

*Gasteruption ogasawarensis* Matsumura & Watanabe, 1934

日本固有種。小笠原諸島に分布する。体長 10mm で、1905 年に発見された。分布は局地的で、グリーンアノール等の影響 (52) が懸念される。

【参考文献】 128)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 セイボウ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ミヤマツヤセイボウ *Philoctetes monticola* (Tsuneki, 1975)

日本固有種。本州に分布する。体長 7~10mm で、宿主のアリマキバチ、イスカバチ類の営巣する落葉樹が減少し、生息地は狭められている。現在、生息が確認されているのは、青森県、山形県、宮城県、福井県のみ。

【参考文献】 13)、120)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 シロアリモドキヤドリバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シロアリモドキヤドリバチ *Caenosclerogibba japonica* Yasumatsu, 1958

日本固有種。九州に分布する。体長2mmで、新属新種として記載され、コケシロアリモドキに半外部寄生。分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、鹿児島のみ。

【参考文献】 140)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 アリ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヤクシمامカシアリ *Leptanilla tanakai* Baroni Urbani, 1977

日本固有種。屋久島のみ分布する。体長1mmで、本属の種は土中に生息し、サスライアリ同様放浪性生活をするといわれている。記録は少なく、生息地が限られている。

【参考文献】 8)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ベッコウバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## キマダラズアカベッコウ *Machaerothrix tsushimensis* Yasumatsu, 1939

日本固有種。本州、対馬に分布する。体長7.5mm。対馬から1930年に発見され、分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、埼玉県、対馬のみ。

【参考文献】 97)、139)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ベッコウバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アケボノベッコウ *Anoplius eous* Yasumatsu, 1936

日本固有種。本州、九州に分布する。体長20mm。分布は局地的で、現在生息が確認されているのは、埼玉県、福井県、大阪府、兵庫県、広島県、福岡県、鹿児島県など。

【参考文献】 138)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 アリマキバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## カラトイスカバチ *Passaloecus koreanus* Tsuneki, 1982

日本固有種。本州に分布する。アブラムシ類を狩る。分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、埼玉県、東京都、静岡県、石川県、福井県、兵庫県のみ。

【参考文献】 14)、121)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ギングチバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## タイセツギングチ *Crossocerus pusillus* Lepeletier & Brulle, 1834

国内では北海道、本州に分布し、国外では欧州北部、朝鮮半島、千島に分布する。体長約6mm。分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、北海道、宮城県、栃木県、群馬県、埼玉県、新潟県、長野県、富山県、石川県、福井県のみ。

【参考文献】 66)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ギングチバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## アギトギングチ *Ectemnius martjanowii* (F. Morawitz, 1892)

国内では本州に分布し、国外では、サハリン、シベリア、千島、朝鮮半島、中国、シッキムに分布。分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、青森県、宮城県、福島県、栃木県、群馬県、埼玉県、新潟県、長野県、山梨県、静岡県、富山県、石川県、岐阜県、福井県。

【参考文献】 15)、117)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ギングチバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ニトベギングチ *Spadicocrabro nitobei* (Matsumura, 1912)

日本固有種。本州に分布する。体長18mmで、ヤガ類の成虫を狩る。分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、青森県、山形県、新潟県、長野県、富山県、石川県、三重県、福井県。

【参考文献】 65)、98)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)



ハチ目 ジガバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## マエダテツチスガリ *Cerceris pedetes* Kohl, 1887

国内では本州に分布、国外では中国、朝鮮半島、シベリアなどに分布する。分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、青森県、山形県、埼玉県、石川県、福井県のみ。

【参考文献】 118)、123)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ジガバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## テングツチスガリ *Cerceris teranishii* Sato, 1927

日本固有種。本州に分布する。体長 13 mm で、岩手県小岩井農場で 1923 年に発見された。分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、岩手県のみ。

【参考文献】 92)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

ハチ目 ミツバチ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ノサップマルハナバチ *Bombus florilegus* Panfilov, 1956

国内では北海道、千島南部にも分布する。分布は局地的で、現在、生息が確認されているのは、北海道根室半島と野付半島のみ。後者でセイヨウオオマルハナバチが捕獲されているため、影響が懸念される。

【参考文献】 78)、89)

執筆者：多田内 修 (九州大学農学研究院)

シリアゲムシ目 シリアゲムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## シコクミスジシリアゲ *Panorpa globulifera* Miyamoto, 1994

日本固有種で、四国山地 (石鎚山系や剣山山系) にのみ生息する。愛媛県石鎚山、岩黒山、徳島県剣山 (大剣神社) から採集された個体をもとに 1994 年、新種として記載された。前翅長は 15~18mm で、端帯とその内側に 2本の幅広い帯紋があるので「ミスジ」の名がある。成虫は 7、8月に出現する。詳細な調査は行われていないが、個体数はあまり多くないと考えられる。本州および九州に分布するミスジシリアゲと翅斑は似るが、交尾器の形態は明らかに違う。

【参考文献】 57)

執筆者：鈴木信夫 (日本女子体育大学)

シリアゲムシ目 シリアゲムシ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒウラシリアゲ *Panorpa hiurai* Miyamoto, 1985

日本固有種で、滋賀県の比良山周辺と京都府の一部に分布するが、福井県側にも生息する可能性がある。前翅長は12~15mmで、翅の基部から縁紋にかけて縦条がある。個体数・生態等不明な点が多いが、生息が局地的で今後の調査でも分布域がそれ程広がるとは考えにくい。成虫は5~6月上旬に出現する。近縁種で神奈川県、長野県、奈良県に分布するキアシシリアゲは、翅の逆Y条が2個であるのに対し、本種では3個である。

【参考文献】 86)

執筆者：鈴木信夫 (日本女子体育大学)

ハエ目 ハネカ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## カスミハネカ *Nymphomyia alba* Tokunaga, 1932

日本固有種。国後島、本州、四国に分布する。体長約2mm。翅は細長い三角形で、翅脈に乏しく、非常に長い縁毛が生じる。キョクトウハネカとの区別には交尾器の比較が必要となる。やや川幅の広い清流に生息し、河川開発 (13) や水質汚濁 (31) により生息地が狭まっている。

【参考文献】 26)

執筆者：林 利彦 (国立感染症研究所)

ハエ目 ハナアブ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ケンランアリノスアブ *Microdon katsurai* Maruyama & Hironaga, 2004

日本固有種。本州のみに局地的に分布する。体長12~15mmで、アリノスアブ中唯一体色が光沢ある淡緑色の種。本種はトゲアリの巢中で生育するが、トゲアリは平地の湿潤な林内の樹洞に営巣するため土地造成 (23) 等により発生環境が狭められている。

【参考文献】 37)、53)

執筆者：林 利彦 (国立感染症研究所)

チョウ目 シジミチョウ科

DD (情報不足) [新規掲載]

## ヒメウラボシシジミ *Neopithecops zalmora zalmora* (Butler, 1870)

インド~東南アジアに広く分布する。国内では石垣島で1924年に古い記録があるが、1996年に西表島で再発見され、その後、石垣島、波照間島でも発見された小型のシジミチョウ。翅表は黒色で前翅に白い紋がある。裏面は白色で、外縁に沿う黒点列があり、後翅には黒紋がある。生息地はきわめて狭く、採集圧の影響を受けやすいと考えられる。ハナシボウギの生育する海岸付近の森林に生息するが、もともと生息していたものか、偶産なのか判断が難しいため、情報不足とした。

【参考文献】 102)、104)

執筆者：藤井 恒 (日本チョウ類保全協会)

## 付属説明資料 昆虫類 参考文献

- 1) 愛知県環境部自然環境課編, 2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックあいち—動物編. 愛知県環境部自然環境課. 596pp.
- 2) Akimoto, S., 1983. A revision of the genus *Eriosoma* and its allied genera in Japan (Homoptera: Aphidoidea). Insect. Matsum., new series, 27: 37-106.
- 3) 秋山美文, 2005. 広島県のヒメドロムシ科.比和科学博物館研究報告, (44): 205-219.
- 4) 青森県環境生活部自然保護課編, 2000. 青森県の希少な野生生物. 青森県環境生活部自然保護課. 284pp.
- 5) 新井志保・吉富博之・丸山宗利, 2004. 日本の潮間帯性甲虫. 昆虫と自然, 39(12): 21-24.
- 6) Asahina, S., 1974. The cavernicolous cockroaches of the Ryukyu Islands. Mem. Natn. Sci. Mus.,Tokyo, 7: 145-156, 1 pl.
- 7) 朝比奈正二郎, 1991. 日本産ゴキブリ類. 中山書店, 東京. x+253 pp. 11 pls.
- 8) Baroni Urbani, C., 1977. Materiali per una revisione della sottofamiglia Leptanillinae Emery. Entomologica Basiliensia, 2: 427-488.
- 9) 千葉県環境部自然保護課編, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—. 千葉県環境部自然保護課. 438pp.
- 10) Darlington, P. J., 1970. Coleoptera: Carabidae including Cicindelinae. Insects of Micronesia ,15(1): 1-49.
- 11) 福田晴夫, 1992. 鹿児島県のチョウ. 春苑堂出版, 鹿児島. 223pp.
- 12) Gurney, A. B., 1961. Further advances in the taxonomy and distribution of the Grylloblattidae. Proc. Biol. Soc. Wash., 74: 67-76.
- 13) 羽田義任, 1987. 福井県蜂類分布資料. 福井虫報, (1): 18-19.
- 14) 羽田義任, 1993. ミシマイスカバチ福井石川県に分布する. 福井虫報, (13): 60.
- 15) 羽田義任, 1997. 福井県蜂類分布資料. 福井虫報, (20): 3-8.
- 16) Hasegawa, H. and M. Hayashi, 1995. Discovery of *Arctocoris kurilensis* (Heteroptera, Corixidae) from Hokkaido and Honshu. Jpn. J. Entomol., 63: 322.
- 17) 橋本 碩, 1970. 海にすむ昆虫. インセクタリアム, 7(7): 15.
- 18) 林 成多, 2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.
- 19) 林 成多, 2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録 (2) ネクイハムシ属・キイロネクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, (9): 151-192.
- 20) 林 成多, 2007. 島根県産水生甲虫類の分布と生態. ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 77-113.
- 21) 林 正美, 2003. カメムシ類 (半翅目). 琉球列島の陸水生物, pp. 351-365. 東海大学出版会, 東京.
- 22) Hayashi, M., 2007. Ecological notes on the adult stage of *Graphelmis shirahatai* (Nomura) (Coleoptera, Elmidae). Elytra, Tokyo, 35: 102-107.
- 23) Hayashi, M. and S. Miyamoto, 2001. Occurrence of *Glaenocoris propinqua cavifrons* in Japan and an additional record of *Arctocoris kurilensis* from Honshu (Heteroptera, Corixidae). Jpn. J. syst. Entomol., 7: 123-125.
- 24) Higuchi, H., 1972. A taxonomic study of the subfamily Callipterinae in Japan. Insect. Matsum., 35: 40-41.
- 25) 平野幸彦, 1996. アバタツヤナガヒラタホソカタムシは絶滅種か. 神奈川虫報, 115: 19-22.
- 26) 平嶋義宏・森本桂 (監修), 2008. 新訂原色昆虫大圖鑑Ⅲ. 北隆館, 東京. 654pp.
- 27) 平塚和弘, 2008. 事務局だより. 北海道トンボ研究会報, 18号.
- 28) 久松定成, 1970. 長崎産アラメゴミムシダマシ. あげは, 11: 20.
- 29) 堀 繁久, 1995. 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書, 大雪山・日勝圏域. 北海道環境科学研究センター, 札幌. 363pp.
- 30) 堀 繁久・伊藤勝彦, 2001. 日本から新たに発見されたオクエゾクロマメゲンゴロウ (新称). 月刊むし, (361): 14-15.
- 31) 堀口 徹, 2005. 静岡県産のヒメキイロマグソコガネ. 鯉角通信, (10): 33.

- 32) Ichikawa, A., 2001. New species of Japanese crickets (Orthoptera: Grylloidea) with notes on certain taxa. *Tettigonia*, (3): 45-58.
- 33) 今坂正一, 1985. イソジョウカイモドキについての小観察. 月刊むし, (173): 34.
- 34) 井村有希・永幡嘉之, 2006. リシリノマックレイセアカオサムシーさいはての島の小さな奇跡. 六本脚, 東京. 120pp.
- 35) Inoue, H. and Y. Miyatake, 2001. Taxonomic study of the superfamily Psylloidea (Homoptera: Sternorrhyncha) on the Ogasawara (Bonin) Islands. Part 1, Aphalaridae, Psyllidae and Carsidaridae, with descriptions of four new species. *Entomol. Sci.*, 4: 459-475.
- 36) Ito, G., 2003. *Ogasawaracris gloriosus*, a new genus and species of possibly extinct grasshopper (Orthoptera, Acrididae) from Ogasawara Islands. *Entomol. Sci.*, 6: 85-88.
- 37) 岩井大輔・丸山宗利, 2005. 栃木県におけるケンランアリノスアブの生息地の現状. はなあぶ, 19: 54-55.
- 38) 金井直樹・堀口 徹, 2005. クロモンマグソコガネの採集と生息状況. 鯉角通信, (10): 7-10.
- 39) 加納六郎・G. Field・篠永哲, 1967. *Fauna Japonica, Sarcophagidae (Insecta Diptera)*. 啓学出版. \*\*\*pp.
- 40) 荻部治紀, 2004. タマムシ科. 神奈川県立博物館調査研究報告 (自然科学), (12): 73.
- 41) Kasahara, S., 1991. Three new carabid beetles from the Ogasawara Island. *Elytra*, Tokyo, 19: 243-250.
- 42) Kasahara, S. and S. Saito, 1997. Occurrence of a new pterostichine carabid beetle in the Boso Peninsula, central Honshu, Japan. *Elytra*, Tokyo, 15: 1-49.
- 43) 川井信矢, 2004. オオコブスジコガネの採集と飼育. 鯉角通信, (10): 1-10.
- 44) 川上洋一, 2007. ヤマトセンブリ. 世界珍虫図鑑, pp.134-135. 柏書房, 東京.
- 45) 霧多布湿原トラスト, 2004. 霧多布湿原いきものリスト2004. 158pp.
- 46) コガネムシ研究会 (監修), 川井信矢・堀 繁久・河原正和・稲垣政志 (編・著), 2005. 日本産コガネムシ上科図説. 第1巻 (食糞群). 六本脚, 東京. 189 pp.
- 47) Kubota, K. and K. Yahiro, 2005. Description of an isolated and specialized population of *Carabus arrowianus* (Breuning, 1934) (Coleoptera, Carabidae) discovered in the southmost part of Mie Prefecture, Japan, as a new subspecies, with analyses of its morphological features. *Biogeography*, 5: 9-16.
- 48) 熊本県希少野生動物植物検討委員会編, 1998. 熊本県の保護上重要な野生動物植物—レッドデータブックくまもと—. 熊本県環境生活部自然保護課. 382pp.
- 49) 栗原崇至・栗原 猛, 2006. 長野県上田市内のマルコブスジコガネの記録. 鯉角通信, 13: 27-28.
- 50) 黒沢良彦, 1974. イソジョウカイモドキの分布北限. 甲虫ニュース, (21,22): 9.
- 51) 黒沢良彦, 1985. タマムシ科. 原色日本甲虫図鑑III, 2-20. 保育社, 大阪.
- 52) 榎原 寛ほか, 2004. グリーンアノールが小笠原諸島の昆虫相、特にカミキリムシ相に与えた影響—昆虫の採集記録と捕食実験からの評価—. 森林総合研究所研究報告, 3: 165-183.
- 53) Maruyama, M. and T. Hironaga, 2004. *Microdon katsurai*, a new species of myrmecophilous hoverfly (Diptera, Syrphidae) from Japan, associated with *Polyrhachis lamellidens* (Hymenoptera, Formicidae). *Bull. Natl. Sci. Mus. Ser. A*, 30: 173-179.
- 54) 松本慶一, 2001. 小笠原諸島のオサムシ科甲虫. 東京都高尾自然科学博物館研究報告, 20: 19-23.
- 55) 三宅 武・森 高樹, 2005. キョウトチビコブスジコガネ九州に産す. 鯉角通信, (10): 26.
- 56) Miyamoto, S., 1985. Description of a new species of the genus *Panorpa* Linnaeus (Mecoptera, Panorpidae). *Kontyû*, 53: 199-201.
- 57) Miyamoto, S., 1994. Scorpion-flies of the Shikoku Mountains, with descriptions of two new species of the genus *Panorpa* Linnaeus. *Trans. Shikoku Ent. Soc.*, 20: 221-228.
- 58) Miyatake, Y., 1968. *Pachypsylla japonica* sp. nov., a remarkable lerp-forming psyllid from Japan (Homoptera: Psyllidae). *Bull. Osaka Mus. Nat. Hist.*, (21): 5-12.
- 59) Miyatake, Y., 1980. Notes on the genus *Pachypsylla* of Japan, with description of a new species (Homoptera: Psyllidae). *Bull. Osaka Mus. Nat. Hist.*, (33): 61-70.
- 60) Miyazaki, M., 1971. A revision of the tribe Macrosiphini of Japan (Homoptera: Aphididae, Aphidinae). *Insect.*

- Matsum., 34: 1-247.
- 61) 宮崎県版レッドデータブック作成検討委員会編, 2000. 宮崎県の保護上重要な野生生物—宮崎県レッドデータブック—. 宮崎県環境科学協会, 宮崎. 386pp.
  - 62) 森 正人・北山 昭, 1993. 図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京. 217pp.
  - 63) Morimoto, K., 1981. Curculionidae and Rhynchophoridae (Coleoptera) of the Ogasawara Islands. Part 1. Otorhynchinae and Cryptorhynchinae (1). J. Fac. Agr., Kyushu. Univ., 25: 175-199.
  - 64) 森田誠司・白井勝巳・蟹江昇・長谷川道明, 1996. 愛知県におけるキバナガミズギワゴミムシ類の採集記録. 豊橋市自然史博物館研究報告, 6: 27-30.
  - 65) 室田忠男, 1994. 福井県蜂類分布資料. 福井虫報, (15): 49-50.
  - 66) 室田忠男, 1998. 福井県蜂類分布資料. 福井虫報, (23): 9-16.
  - 67) 長野県生物多様性研究会・長野県自然保護研究所・長野県生活環境部環境自然保護課編, 2004. 長野県版レッドデータブック—長野県の絶滅のおそれのある野生生物—動物編. 長野県生物多様性研究会・長野県自然保護研究所・長野県生活環境部環境自然保護課. 321pp.
  - 68) Naito, T., 1973, A new species of *Nipponorhynchus* Takeuchi from Japan (Hymenoptera: Tenthredinidae). Kontyû, 41: 95-96.
  - 69) 中川 明, 1954. 日本産ゲンゴロウ科幼虫の研究. 新昆虫, 7(10): 2-6.
  - 70) Nakane, T., 1955. Marine insects of the Tokara Islands V. Three new species of the genus *Laius* Guérin from Kyushu and the Tokara Islands, with notes on a species from Marianna. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 4: 373-379.
  - 71) 中根猛彦, 1987. 日本の甲虫 (82). 昆虫と自然, 22(13): 27-29.
  - 72) 中根猛彦, 1993. 北日本のガムシ数種の記録. 昆虫と自然, 28(9): 23.
  - 73) 南部敏明, 2005. ジガバチモドキ類 (*Typoxylon* spp.) の採集記録. 埼玉動物研通信, (50): 22-26.
  - 74) Nemoto, K., 1989. A new species of *Pterostichus* from Amami Oshima Island, southwest Japan (Coleoptera: Carabidae). Akitsu(N. S.), 106: 1-12.
  - 75) 日本鞘翅目学会編, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 東京. 565pp.
  - 76) 新潟県環境生活部環境企画課編, 2001. レッドデータブックにいがた. 新潟県環境生活部環境企画課. 467pp.
  - 77) Niisato, T. and H. Karube, 2007. Additional records of clytine species (Coleoptera, Cerambycidae) from the Ogasawara Islands (3) Revised notes on the *Chlorophorus* species from Muko-jima Island. Elytra, Tokyo, 35: 205-215.
  - 78) 西村正賢, 2005. 近年におけるノサップマルハナバチの確認状況. つねきばち, (4): 27.
  - 79) Nomura, S., 1958. Notes on the Japanese Dryopoidea (Coleoptera), with two new species from Saghalien. Toho-Gakuho, 8: 45-59.
  - 80) Nomura, S., 1975. Mordellidae of the Bonin Islands (Coleoptera). Ent. Rev. Japan, 28: 29-45.
  - 81) 緒方 健, 2007. 河川に生息する甲虫目の微生息環境. 水辺の輪, (25): 10-15.
  - 82) 緒方 健・中島淳, 2006. 福岡県のヒメドロムシ. ホシザキグリーン財団研究報告, (9): 227-243.
  - 83) 沖縄県文化環境部自然保護課 (編), 2005. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータおきなわ—. 沖縄県. 561 pp.
  - 84) 大林延夫・新里達也編, 2007. 日本産カミキリムシ. 東海大学出版会, 秦野. xii+818pp.
  - 85) 大桃定洋, 1989. 栃木県北東部の水生食肉亜目甲虫に関する分布資料. 甲虫ニュース, (86): 5-6.
  - 86) Ohmomo, S. and H. Karube, 2004. On a new subspecies of *Tamamushia virida* Miwa et Chujo, 1935 from the Ogasawara Islands. 神奈川県立博物館調査研究報告 (自然科学), (12): 87-88.
  - 87) Quicke, D.L.J., 1989. The Indo-Australian and E. Palaearctic braconine wasp genus *Euurobracon* (Hymenoptera: Braconidae). J. Nat. Hist., 23: 775-802.
  - 88) 斎藤洋一・宮崎俊行・松木和雄, 1991. 千葉県市川市の蜻蛉相. 房総の昆虫, (4): 22-30.
  - 89) Sakagami, S. F. and R. Ishikawa, 1969. Note préliminaire sur la répartition géographique des bourdons japonais, avec descriptions et remarques sur quelques formes nouvelles ou peu connues. J. Fac. Sci. Hokkaido Univ. VI, Zool., 17: 152-196.

- 90) Satake K. and R.B. Kuranishi, 2007. Further studies on caddisflies (Insecta: Trichoptera) collected from the Bonin Islands and the Izu Archipelago, Japan. In: Bueno-Soria J., Barba-Alvarez R., and B.J. Armitage (eds.), Proceedings of the 12th International Symposium on Trichoptera (Mexico City, Mexico), pp. 279-284. The Caddis Press, Columbus, Ohio.
- 91) Satake, K., R. B. Kuranishi and R. Ueno, 2005. Caddisflies (Insecta: Trichoptera) collected from the Bonin Islands and the Izu Archipelago, Japan. In: Tanida, K. & A. Rossiter (eds.), Proceedings of the 11th International Symposium on Trichoptera (2003, Osaka), pp. 371-381. Tokai University Press, Kanagawa.
- 92) 佐藤 覺, 1927. *Cerkeris teranishii* Sato, n. sp. 及 *C. navitatis* Smith. 附、内地産 *Cerkeris* 属の検索表. Kontyû, 2: 91-99.
- 93) Satô, M., T. Ogata, J. Nakajima and Y. Kamite, 2005. Recent records of *Orientalmis parvula* (Coleoptera, Elmidae) in Japan, with a proposal for the conservation. Jpn. J. Syst. Entomol., 11: 63-66.
- 94) 佐藤正孝・吉富博之, 2004. コウチュウ目. 日本産水生昆虫検索図説, pp.591-658. 東海大学出版会, 東京.
- 95) Satô, M. and H. Yoshitomi, 2004. Discovery of a second representative of the genus *Horelophopsis* (Coleoptera, Hydrophilidae) from the Ryukyu archipelago, Japan. Elytra, Tokyo, 32(1): 41-49.
- 96) 佐藤隆士・鈴木祥悟・植原寛, 2006. アカマダラハナムグリのハチクマ巣利用. 昆虫. ニューシリーズ, 9(2): 46-49.
- 97) Shimizu, A., M. Wasbauer, S. Marius and M. Ujiie, 1998. Taxonomic importance of the female apicoventral setae on hindtarsomere V of the Pompilidae (Hymenoptera), with special reference to phylogeny of the family. Entomol. Sci., 1 (3): 427-439.
- 98) 下山健作, 1987. 青森県のニトベギングチ採集・巣の観察. 蜂友通信, (27): 46-56.
- 99) Shinji, O., 1930. On two species of Japanese Aphididae. Lansania, 2(12): 26-29.
- 100) 進士織平, 1941. 日本蚜蟲総説, pp. 1014-1018. 修教社書院, 東京.
- 101) Shinohara, A. and J.-W. Lee, 1997. Collection records of Pamphiliid sawflies (Hymenoptera, Pamphiliidae) from Korea., Bull. Nat. Sci. Mus., Tokyo, ser. A, 23: 213-220.
- 102) 白水 隆, 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京. 336pp.
- 103) 静岡県自然環境調査委員会編, 2004. まもりたい静岡県の野生生物一県版レッドデータブックー〈動物編〉. 羽衣出版, 静岡. 351pp.
- 104) 巢瀬 司・枝恵太郎編, 2003. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本鱗翅学会, 東京. 244pp.
- 105) Takahashi, R., 1925. Aphididae of Formosa IV. Dept. Agr., Gov. Res. Inst. Rept., 16: 11-13.
- 106) Takahashi, R., 1927. Aphididae of Formosa V. Dept. Agr., Gov. Res. Inst. Rept., 22: 9-11.
- 107) 高桑正敏, 1985. 小笠原のハナノミ族について. 月刊むし, (176): 4-11.
- 108) 高桑正敏, 2004. ハナノミ科. 神奈川県立博物館調査研究報告 (自然科学), (12): 75-76.
- 109) 高桑正敏・荻部治紀, 2004. カミキリムシ科. 神奈川県立博物館調査研究報告 (自然科学), (12): 77-79.
- 110) 高桑正敏・勝山輝男・木場英久編, 2006. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原. 442pp.
- 111) 高岡宏行, 2002. 南西諸島におけるブユの分類、分布および生態ーブユの採集、標本作製、形態観察、同定ガイドー. 衛生動物, 53(suppl.2): 55-80.
- 112) Takeuchi, K., 1938. A systematic study on the Suborder Symphyta of the Japanese Empire (I). Tenthredo, 2: 173-229.
- 113) Takizawa, H., 1982. Notes on Japanese Chrysomelidae (Coleoptera). Ent. Rev. Japan, 37: 55-60.
- 114) 田村克徳, 2007. 福島県いわき市でニッポンセスジダルマガムシを採集. 月刊むし, (436): 38.
- 115) Togashi, I., 1972. Discovery of the genus *Xylecia* Ross (Hym., Xyelidae) from Japan, Kontyû, 40: 87-89.
- 116) Togashi, I., 1972. Sawflies of Mt. Hiko, Kyushu (Hym., Symphyta). Mushi, 18(5): 53-64.
- 117) 常木勝次, 1956. アギトギングチバチの種名、分布及び雄の多形等について. 昆虫, 24: 128-132.
- 118) Tsuneki, K., 1961. Studies on *Cerkeris* of North Eastern Asia (Hymenoptera, Sphecidae). Mem. Fac. Lib. Art. Fukui Univ. II, (11): 1-72.
- 119) Tsuneki, K., 1973. New and the first recorded species and subspecies of Sphecidae and Mutillidae from Japan, with taxonomic notes on some species (Hymenoptera). Etizenia, (65): 1-28.

- 120) Tsuneki, K., 1975. New cuckoo wasps found in Japan. *Kontyû*, 43: 29-35.
- 121) Tsuneki, K., 1982. List of the species of the Sphecidae known from the Korean Peninsula. *SPJHA*, (20): 14-19.
- 122) Tsuneki, K., 1984. Solitary wasps newly collected in the Ogasawaras or the Bonin Islands (Hymenoptera). *Special Publs Jap. Hym. Ass.*, 28: 1-11.
- 123) Tsuneki, K. and Y. Haneda, 1964. On *Cerceris pedetes* Kohl of Japan, with a description of the male, *AKITU*, 11: 35-47.
- 124) Uchida, T., 1932. Beitrag zur Kenntnis der japanischen Aulaciden (Hym.) *Trans. Sapporo nat. Hist. Soc.* 12: 189-193.
- 125) 植松辰美, 1962. コオロギモドキ (ガロアムシ) の一新種チュウジョウムシ (新称) について. 採集と飼育, 25(4): 43.
- 126) Uéno, S., 1955. New cave-dwelling anchomenids of Japan. *Opusc. Ent.*, 20: 56-64.
- 127) 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑II. 保育社, 大阪. 514pp+80pls.
- 128) Watanabe, C., 1934. On Evaniidae and Gasteruptionidae from Japan (Hymenoptera). *Trans. Sapporo nat. Hist. Soc.*, 13: 280-286.
- 129) Watanabe, C., 1934. Notes on Braconidae of Japan V. *Euurobracon*. *Insect. Matsum.*, 9: 19-23.
- 130) 山田訓二, 1997. 網走にエゾガムシ生息. もよろ, (35): 21.
- 131) 山川雄大, 1993. 北海道網走管内からガムシ類2種を記録. 月刊むし, (273): 38.
- 132) 山川雄大, 1994. 北海道女満別町からエゾガムシを記録. 月刊むし, (283): 36-37.
- 133) 山川雄大, 1996. エゾガムシを十勝管内で採集. 月刊むし, (303): 36.
- 134) 山川雄大, 1997. エゾガムシを北海道音更町から記録. 月刊むし, (322): 13.
- 135) Yamane, Sk., 1990. A revision of the Japanese Eumenidae (Hymenoptera, Vespoidea). *Insect. Matsum. New Series*, 43: 1-189.
- 136) Yamasaki, T., 1994. On tetrigids of the genus *Austrohancockia* (Orthoptera: Tettigoniidae) of the Ryukyus. *Proc. Jpn. Soc. syst. Zool.*, (50): 46-51.
- 137) Yamazaki, K. and S. Sugiura, 2006. Biology of an endangered exotic beetle, *Blaps japonensis* (Coleoptera, Tenebrionidae) in the laboratory. *Elytra*, Tokyo, 34: 357-362.
- 138) Yasumatsu, K., 1936. Über einige neue oder seltene Mordwespen aus Japan. *Mushi*, 9: 23-29.
- 139) Yasumatsu, K., 1939. On the occurrence of the splendid genus *Machaerothrix* Haupt in Tsushima, with some remarks on the genus (Hymenoptera, Pompilidae). *Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa*, 29: 275-278.
- 140) Yasumatsu, K., 1958. A new addition to the genera of the Sclerogibbidae (Hymenoptera). *Kontyû*, 26: 20-24.
- 141) 吉田雅澄, 2006. オオサカサナエ. 滋賀県生きもの総合調査委員会 (編), 滋賀県で大切にすべき野生生物—滋賀県レッドデータブック 2005年版—, p. 371. サンライズ出版, 彦根.
- 142) 吉富博之, 1989. 千葉県におけるイソジョウカイモドキの観察例. 月刊むし, (226): 28-29.
- 143) 吉富博之, 1996. アヤスジミゾドロムシの採集記録. 甲虫ニュース, (116): 6.
- 144) Yoshitomi, H., 1997. A revision of the Japanese species of the genera *Elodes* and *Sacodes* (Coleoptera, Scirtidae). *Elytra*, Tokyo, 25: 349-417.
- 145) 吉富博之, 1998. ホソキマルハナノミの神奈川県における記録. 甲虫ニュース, (121): 15.
- 146) 吉富博之, 1998. ヒゲナガヒラタドロムシ (新称) の採集記録. 甲虫ニュース, (122): 10.
- 147) 吉富博之, 2006. クロシオガムシの発見とガムシ科の最近の扱い. *昆虫と自然*, 41(14): 31-34.
- 148) 吉富博之, 2006. 溪流の妖精ヒメドロムシ. 丸山宗利 (編著), 森と水辺の甲虫誌, pp. 201-214. 東海大学出版会, 秦野.
- 149) Yoshitomi, H. and J. Nakajima, 2005. A new record of *Ochthebius amami* (Coleoptera, Hydraenidae) from Okinawa-jima Island. *Elytra*, Tokyo, 33: 340.
- 150) Yoshitomi, H. and J. Nakajima, 2005. A new record of *Horelophopsos hanseni* (Coleoptera, Hydrophilidae) from Kyushu. *Elytra*, Tokyo, 33: 376.
- 151) 吉富博之・松井英司・佐藤光一・疋田直之, 2000. 日本産セスジダルマガムシ属概説. 甲虫ニュース, (130): 5-11.
- 152) Yoshitomi, H. and M. Sato, 2001. Discovery of the hydraenid genus *Ochthebius* Leach (Coleoptera, Hydraenidae)

- from Ryukyu Islands, with description of a new species. *Koleopterologische Rundschau*, 71: 105-110.
- 153) 吉富博之・佐藤正孝, 2003. 日本産ヒラタドロムシ科のチェックリストと覚え書き. *甲虫ニュース*, (142): 7-10.
- 154) 吉富博之・白金晶子・疋田直之, 1999. 矢作川水系のヒメドロムシ. *矢作川研究*, 3: 95-116.
- 155) 吉富博之・滝沢春雄, 1999. 新潟県におけるホソキマルハナノミの記録. *甲虫ニュース*, (126): 12.
- 156) Yoshizawa, K., 2001. Systematic study of Amphipsocidae in Japan (Psocodea: Psocoptera: Caeciliusetae), with comments on higher classification within the family. *Insect. Matsum., new series*, 58: 1-25.



## 和名索引

アオノネクイハムシ	CR+EN	4	キョウトチビコブスジコガネ	DD	30
アカオニアメイロカミキリ	DD	34	キンケセダカヤセバチ	DD	37
アカマダラコガネ	DD	31	クチナガハバチ	DD	37
アギトギングチ	DD	39	クロシオガムシ	NT	19
アケボノベッコウ	DD	38	クロツヤアラゲカミキリ	DD	35
アバタツヤナガヒラタホソカタムシ	DD	33	クロヒラタカミキリ	NT	22
アマミセスジダルマガムシ	NT	20	クロヘリウスチャハムシ	NT	24
アマミナガゴミムシ	CR+EN	2	クロモンマグソコガネ	NT	21
アマミハリムネモモトカミキリ	DD	35	ケズネケシカミキリ	NT	23
アマミヒラタヒシバツタ	NT	16	ケズネチビトラカミキリ	DD	35
アヤスジミゾドロムシ	VU	10	ケハラゴマフカミキリ	NT	23
アラメゴミムシダマシ	DD	34	ケヤキワタムシ	DD	28
イスマナガゴミムシ	VU	8	ケンランアリノスアブ	DD	41
イソジョウカイモドキ	DD	32	コトラカミキリ	NT	22
ウスイロオナガシジミ九州亜種	CR+EN	6	コハンミョウモドキ	VU	7
ウマノオバチ	NT	24	サツマツノマユブユ	CR+EN	5
ウラギンスジヒョウモン	NT	25	サンゴアメンボ	NT	16
エゾアカネ	NT	15	シコクミスジシリアゲ	DD	40
エゾガムシ	VU	8	ジャアナヒラタゴミムシ	VU	8
エノキカイガラキジラミ	NT	16	シロアリモドキヤドリバチ	DD	38
エラブモリゴキブリ	DD	27	シロオビヒカゲ	NT	25
オオカバヒラタカメムシ	NT	17	シロオビヒメヒカゲ札幌周辺亜種	NT	25
オオコブスジコガネ	VU	9	シロスジトゲバカミキリ	DD	36
オオサカサナエ	NT	14	シロズヒラタハバチ	DD	36
オオチャイロヒラタカメムシ	DD	29	ズグロヒメハナノミ	DD	33
オオメミズムシ	DD	29	ススキサビカミキリ	DD	35
オガサワラキイロトラカミキリ	VU	12	スナハラゴミムシ	NT	18
オガサワラキボシハナノミ	VU	11	セマルオオマグソコガネ	DD	31
オガサワラキンオビハナノミ	CR+EN	3	セマルヒメドロムシ	VU	10
オガサワラギングチバチ	VU	13	タイセツギングチ	DD	39
オガサワラコンボウヤセバチ	DD	37	ダイセツマグソコガネ	NT	21
オガサワラチビドロバチ	VU	12	ダイトウヒラタクワガタ	VU	8
オガサワラトラカミキリ	VU	11	タイワンコオイムシ	DD	28
オガサワラナガタマムシ	DD	32	ダルママグソコガネ	DD	31
オガサワラニンギョウトビケラ	VU	13	チシマミズムシ	DD	28
オガサワラビロウドカミキリ	NT	23	チチジマジガバチモドキ	VU	13
オガサワラムツボンタマムシ父島列島亜種	VU	10	チチジマヒメハナノミ	DD	33
オガサワラモリヒラタゴミムシ	CR+EN	2	チャイロナギナタハバチ	DD	36
オキナワカブトムシ	DD	31	チャイロヒメカミキリ小笠原亜種	NT	22
オキナワサビカミキリ	VU	12	チャバネエンマコガネ	VU	9
オクエゾクロマメゲンゴロウ	NT	19	チャマダラキジラミ	VU	7
オグマサナエ	VU	6	チュウジョウムシ(メギシマガロアムシ)	DD	27
カスミハネカ	DD	41	ツツイキバナガミズギワゴミムシ	NT	18
カラトイスカバチ	DD	39	ツツジコブアブラムシ	VU	7
カラフトヒョウモン	NT	25	ツマキレオナガミズスマシ	NT	19
カイホリアナゴキブリ	DD	26	ツマベニタマムシ父島・母島列島亜種	VU	10
キバネキバナガミズギワゴミムシ	NT	18	ツマベニタマムシ髯島亜種	CR+EN	3
キバネマグソコガネ	NT	21	ツヤケシマグソコガネ	VU	9
キベリマルクビゴミムシ	NT	17	ツヤヒメマルタマムシ	NT	21
キマダラズアカベッコウ	DD	38	テングツチスガリ	DD	40

ナゴヤサナエ	NT	14	マエダテツチスガリ	DD	40
ニシキギヒゲナガアブラムシ	NT	16	マボロシオオバッタ	DD	27
ニセチャイロヒメハナノミ	VU	11	マルガタゲンゴロウ	NT	19
ニセミヤマヒメハナノミ	CR+EN	3	マルコブスジコガネ	NT	20
ニッポンセスジダルマガムシ	DD	30	ミヅナシミズムシ	NT	17
ニトベギングチ	DD	39	ミチノクケマダラカミキリ	NT	23
ネアカヨシヤンマ	NT	15	ミナミトンボ	NT	15
ノサップマルハナバチ	DD	40	ミハマオサムシ	CR+EN	2
ハガマルヒメドロムシ	DD	32	ミヤコホラアナゴキブリ	DD	26
ハシバミヒゲナガアブラムシ	VU	7	ミヤコモリゴキブリ	DD	26
ハネビロエゾトンボ	VU	6	ミヤマツヤセイボウ	DD	37
ハハジマヒメカタゾウ	VU	12	ムクロジヒゲマダラアブラムシ	DD	28
ハハジマヒメハナノミ	DD	33	ムコジマトラカミキリ	CR+EN	4
ハハジマモリヒラタゴミムシ	CR+EN	3	ムニンツツレサセコオロギ	NT	15
ハリサシガメ	DD	29	ムニンヤツデキジラミ	VU	6
ヒウラシリアゲ	DD	41	メガネサナエ	NT	14
ヒゲナガヒラタドロムシ	DD	32	モートンイトトンボ	NT	13
ヒダクチナガハバチ	DD	36	ヤエヤマクロスジホソハナカミキリ	DD	34
ヒメイチモンジセセリ	NT	24	ヤエヤマサシガメ	DD	29
ヒメウラボシシジミ	DD	41	ヤクシマエンマコガネ	VU	9
ヒメカタゾウムシ父島亜種	NT	24	ヤクシマムカシアリ	DD	38
ヒメカタゾウムシ母島亜種	CR+EN	4	ヤツシロハマダラカ	CR+EN	5
ヒメキイロマグソコガネ	NT	20	ヤマトオサムシダマシ	NT	22
フタスジサナエ	NT	14	ヤマトセンブリ	DD	30
フタモンマルクビゴミムシ	NT	17	ヤマトモンシデムシ	NT	20
フトキバスナハラゴミムシ	NT	18	ヨツボシカミキリ	VU	11
ホソキマルハナノミ	DD	30	ヨナクニウオレスブユ	CR+EN	5
ホソヒゲチャタテ	DD	27	ヨナハニクバエ	CR+EN	5
ボンヒメハナノミ	DD	34	リシリノマックレイセアカオサムシ	CR+EN	2
ホラアナゴキブリ	DD	26	ワタナベヒメハナノミ	CR+EN	4

改訂レッドリスト 付属説明資料

昆虫類

平成 22 年 3 月

編集・発行 環境省自然環境局野生生物課

エコマーク認定の再生紙を使用しています。(古紙含有率 100%)